

北九州市立文学館紀要 第 3 号

2021 (令和 3) 年 3 月

北九州市立文学館

【資料紹介】

杉田久女 原稿「観自在菩薩」

翻刻・注釈

小野 芳美

はじめに

「観自在菩薩」は「瀧野須寿子」と署名がある小説作品。「KOKURA FUJIMOTO」の四百字詰め原稿用紙三四枚からなる。杉田久女の長女・石昌子が遺品として保管し、二〇〇一年、北九州市に寄贈された。令和二年度の当館での収蔵品展（二〇二〇年六月一日〜七月二六日）で初公開した。

筆跡や言葉遣いが久女資料と酷似していること、石氏が他の久女資料と併せ保管していたこと、作中の事象が久女の出来事と多数符合することから、久女の手になる私小説と考えられる。掲載誌は未確認で、『杉田久女全集』にも収録がなく、未発表作品と考えられる。「瀧野須寿子」名の作品は他に確認されていない。

末尾に「九年六月十六日記」とあり、内容から昭和

九年（一九三四年）と推定される。

この前後の久女は、一九三二年春、主宰誌「花衣」を創刊。七月「ホトトギス」で初巻頭を得、一〇月「ホトトギス」同人となる。「花衣」を五号で終刊（九月）後、自らの句集刊行を願うも師である高浜虚子に容れられない。俳句指導や女性俳句史研究など多方面で才能を発揮するが、周囲との軋轢も強めていく。

虚子は久女から三四年五月から一二月に送られた二〇通の書簡・電報を、久女没後、小説「国子の手紙」として公表する（「文体」四八年二月）。後年の久女の〈偏狭な人格〉イメージを規定づける一因となる。「観自在菩薩」は「国子の手紙」と同じ時期を描く。虚子あて書簡（三四年五月二五付）などと同じ原稿用紙である。〈をかしい〉人という印象を与える「国子の手紙」と照らし合わせると、久女サイドの事情や心情変化を読み解くテキストとして機能する。

原稿の翻刻は次の方針に拠る。

- ・旧字体は新字体に、異体字は通行字体に適宜改めた。
- ・仮名遣いは原稿の通りとした。
- ・削除部分は原稿の通り削除し本文に記載していない。
- ・挿入・ルビ・傍点は原稿の指示の通りとした。
- ・誤字も原稿の通りとし、適宜へで補足した。

瀧野須寿子

今し方剪つて貰つた真紅の牡丹芥子とばらの包をさげて園芸学校⁽¹⁾を出た小夜子は、土埃をあげながら、とぼくと田圃道を歩いて行つた。

麦は緑の穂波を漂はし野茨が川岸にかぶさり咲いて、初夏らしい爽やかな天気だつたが、昨日から今朝もまだ一粒の御飯も口にせず⁽²⁾、一睡もしない極度の興奮からさめた疲労の為め面変わりするほど憔悴としてゐた。

身辺に渦巻く不思議な謎の糸をほぐさうとあせればあせるほど、益々わけが判らなくなつて、泥濘が深くなる。今迄でんで気づかなかつた深淵がすぐ目の下に口をあけてゐた。一体このふしぎな目に見えぬ疑惑の渦は何だろうか？

思つたまゝを明けぱなしで話してしまふ小夜子は昨日も会があつて久し振に上京⁽³⁾の時の話や、四年振でお目にかかゝつた岸先生⁽⁴⁾の噂などとして、いい気になつてゐたが、気がつくとなんとなくそこには変な空氣が漂つてゐた。第一重役だとか素封家の夫人ばかりが十数人集つてゐるこの会で、皆がふだんぎのセルにお化粧なしのきたない女中さんの様な素顔で、指輪もはめてない事だつた。

小夜子は此前、自分が或雑誌に出した此人々の記事⁽⁵⁾に対する反感だといふ事に気がついたが、それはどうかして皆にもつと上達して貰ひたいと

(1) 小倉市上城野にあつた福岡県立企救園芸学校（現福岡県立小倉南高等学校）のこと。「日記抄2」では、三年に「高浜先生の御手伝」として園芸学校校長に「植物取りしらべ」「書籍又意見拝ちやう」したとの記述がある。晩年には「企救園芸学校見学」（一九四〇）と題した句稿もある。

(2) 久女の記事を連想させる言い回し。この「觀自在菩薩」にも似た表現が散見される。

(3) 三四年四月一七日から二八日、久女は自らの句集刊行を志して上京した。前年に続き二度目。久女は「草稿」（『杉田久女遺墨（続）』収録の巻紙句稿）をはじめとしてこの旅を生涯「花の旅」と記した。内容は坂本宮尾「真実の久女」に詳しい。句集のタイトルは「国子の手紙」では「月光」とされているが、増田連や坂本の調査により「磯菜」であつたと判明している。

(4) 高浜虚子がモデルと思われる。

いふ熱心さから出る一つの叱言でもあつた。きれいに掃除された庭へ下りて見ると赤つゝじが咲き藤棚のかげにはあせた花房がおち散らばつてゐた。小夜子は風にそよいでゐる石菖にたち、つゝじにたちしては手帖に句をまとめ記すのだつた。漆黒の鳳蝶がつゝじに翅をふるはしてとまり、又翔りしては、虚空にもつれ上り、或は若葉にかくれゆらくとゆらく翅は碧く輝き、又流れる様に一文字に翅をのべて屋根ごしに大空へかけり去る事もあつた。

選句になるといつもより佳い句が多いので小夜子は沢山にとり、句評もしたが、気のせいかわざと小夜子の選句を試めす様なものが多く交じり、小夜子にいろ／＼と話させては彼女等は顔を見あつて意味ありげに笑つたりした。お車代として御礼の一封とお土産の重詰をもらつて門を出た小夜子は、黒雲がかゝつた様に不愉快で堪らなかつた。それといふのが三四日前その中の一人のK子が突然尋ねてきて、小夜子の花の旅の話などききたゞした後、彼女はしきりに万葉をくさし小夜子の句を、

「二休先生の此句はどこがいいのですか？」

と馬鹿にした様にたづねるのだつた。それは元寇防塁の防人の哀れふかい歌をかねてから愛誦してゐた小夜子がこの正月、箱崎八幡宮にお詣りした時、香椎からの磯づたひにふとうかび出た句⁽⁶⁾で、八年前其松原に転地してゐた事もある⁽⁷⁾彼女にとつては、なつかしい毎日の散歩の思出もあつたから自分の句乍ら執着をもつてゐた。

「私は万葉は好きません。古今の方がよつぽと好です。第一こんな字余

(5) 随筆「落菰む」(「俳句研究」三十四年三月)のことか。「落菰む」は女性俳人の一層の精進を期待する内容だが、冒頭、早春の句会で着飾つた婦人たちが「俳句はそつちのけで」「楽しく弛緩」し談笑するさまを描出し、「美衣飽食の夫人達の中には真摯な芸術欲求も胸をうたれる魂の躍動も概してな(い)」と述べている。

なお、三十四年「ホトトギス」五月号に掲載され、翌月号の雑詠句評会で取り上げられた久女の句「雪嵐す帆柱山冥し官舎訪ふ」に寄せて、後年、橋本多佳子は「この官舎」は八幡製鉄所長官官舎(高余俱樂部、高見俱樂部)であると指摘したうえで、久女がここでの句会を『有閑婦人のお相手は出来ない』と絶交してつた⁽⁸⁾と述べる(「俳句研究」五〇年九月)。これが虚子の「国子の手紙」手紙4の「Y婦人俳句会」と思われる。また、三三年の日記の抜粋「日記抄2」には、何度か「八幡婦人俳句会(句会)」「製つ婦人会」の記述が見える。

り句きらいです」

「古今より歌としては万葉の方がずっと率直で私は好きですよ⁽⁸⁾。一体あなたに私の深い句意はわからないではありませんか？ 防塁をよめば自然防人を私は聯想しますよ」

とつい小夜子もむきになつて、叱言をいつた。實際此句をつくる時も無心に防塁といふものをよむだ丈で他に何の意味も考へもなかつた。

「でも私は万葉は嫌ひです。どうして防人と若菜とむすびつけてよまねばならぬのでせう？」

かうK子は尚反杭的に押し返すのだつた。二人の間には気まづい沈黙がつづいた。K子はうつむいて唇をかみしめてゐた。「アナタに私の句がわかりますか？」といふ小夜子の言葉がいやにかん高く高慢ちに威圧する様నికిこえて不愉快だつた。小夜子は小夜子で、ふだんから一番愛してゐる此年若かな潑刺とした頭のいいK子の我儘さを他の人より一曾強く叱言いひたかつた。常は優しく小夜子をあいそよくもてなし、小夜子も一番信用して、何事も打明け気心も知れて一番親しい人だつたのに、何故か此日はお互に気分がこざれて、しまつた。

少し言ひ過ぎたので小夜子は何となく気の毒にもなり、ばら垣の表迄歩み出て、美しい夏羽織の後姿をほゝえましくも見送つたのだつた。K子に對してはへだてない親しい心地だつたが、尚かすの様に残るのは帰りぎはにK子の言つた皮肉な一言だつた。室の中にはまだ表装してない、觀世音菩薩の絵姿がかけてあつた。之は門下の或婦人がま心こめて描きあげた、

(6) 防塁に触れた句は「ホトトギス」三四年三月号掲載「寇まもる石塁はいづこ磯菜つむ」、四月号掲載「磯菜つむ行手いそがにいざ子ども」など。四月号掲載句については、高崎鳥城・杉田久女氏の万葉俳句に就て「(天の川)三四年七月」で批判され、「いざ子供」のこと」(同誌八月)で反論する。

(7) 久女は一九二六年一月から翌年二月まで福岡県箱崎で病氣療養した。二二年二月以降俳句から離れていたが、この療養を機に句作を再開する。

(8) 三四年四月八日付で書かれた「春日遅々」(俳句月刊)五月号、改稿後「万葉の手古奈とうなひ処女」(全集二巻)でも、万葉好みを述べている。

三幅中の一つで、何もお土産のない急な上京に小夜子は其中一番出来のよい白衣の一幅を岸先生にさし上げたのだつた。

「先生之は私が心をこめて四月八日に描きあげましたので、此眉の処を描くの何度も手が震えて描けないから私は、主人に十日ほど従弟の処へ泊りに行つてもらつて描きあげました。私は観音様が理想なのでございますよ」

とかう言つて三幅の絵をかかげて見せるT子の顔には真心があふれてゐた。光輪を背おつて端座したまふ観音様は、銀線の太いのが欠点であるが、どこに下品な相もなく、心がこもつてゐた。小夜子は喜んで、中でもむらのない白衣観音を恩師岸先生に、道中も自分でかき抱くようにして上京したのでつた。

その観音様の前に座つてじつとみつめてゐたK子は、

「素人にしてはよく出来てますけど、線が太過ぎますね！」

とかう刺す様に言つて、つと其まま歸つていつた。その歸りがけの一言が小夜子の耳に、針の様に鋭く不愉快なひびきをいつ迄ものこした。

借金返していそぐと幾年振に上京した小夜子は方々飛び歩き用件を足して歸つてきたが、それ以来何となく異常な空氣がうづ巻いてゐる様な焦慮不安を頻りに感じはじめ、今迄気づかずにゐたが危く押し流されかけてゐる自分にふと氣付いて、疑心暗鬼を生じかけてゐる矢先だったので昨日も会から帰宅してふと其観音のみ像を見た時、急にむらくと不愉快がこみあげて來た。いい氣になつて、皆を信用し自惚てあけ放しで語つてゐた

自分にも腹が立つた。

「お母さん⁽⁹⁾只今。お淋しかつたでせふ。お土産がありますよ」

と小夜子は留守番の母の前に座つて、風呂敷をあけながら、「私もう皆お断りしようと思ひますのよ、ほんとに不愉快ですもの」

「おや、どうしたの。何かあつたのですか?」

と母は目をぎら／＼光らして怒つてゐる娘の青い顔色をきづかはしげに眺めながら訊いた。

「だつて皆で私をためす様な失敬なことばかりするのですもの。子供達のためにお金があると云つても芸をお金でうるのはいやですわ! 私があんなに大事にして岸先生にさし上げた観音様はくさされるし、私もう何もかもいやになつた」

と小夜子は涙ぐむで先日からの話をする。

母は疳の高ぶつた小夜子を案じつゝ、着物もきかへず、机の前に座りこんで、手紙を書いてはやぶり、書いてはあらためしてゐる我娘の横顔の淋しい影をそつとぬす見ながら、ごそ／＼と夕食の仕度をしたり、七輪に吸物をかけたりして働いてゐる。

上京の前から色々で心をいため続けてゐる小夜子の心もちもわかり、いひ出すと中々きかぬがんこな娘の氣質をしりぬいて、母親は、困つたものだ、だがあの娘の一と通りでない忙しさと気苦労今の境遇ではむりのない所もある。七八年前体をひどくいたためてから、嫌に神経過敏になつた、など、暗い思ひにふけり乍ら、こと／＼覺束ない台所の灯かげで、庖丁を使

(9) 久女の実母赤堀さよは兵庫県宝塚の長兄宅に同居していた。本文ではこののち六月に「十ヶ月振り」で帰つて行くという記述があり、さよは三三年夏より来倉していたことがわかる。久女は三三年初夏にも句集刊行を志し上京しており、この留守間の手伝いとして来たものか。

つてゐる母親は、まあせめてかわい想だから私が出来る丈たすけてやろう、之も人助けだ、自分はもういつ浄土へお詣りする体か知れないから、というく考へるのである。

年よつた母のごとく働いてゐる足音を心の中ではすまないくと気にしながら、小夜子はどういふものか身動きするのもしやで、只じつと鉛のように考へこんでしまつた。

皆で自分一人を嘲笑し、試験し、よつてたかつて熱湯をのました様にすつかり思ひ込んでしまつた小夜子は、もう今日限り会の方も御断りしてしまふと手紙を書いて、K子から借りてゐた二十円をも今日の御礼の五円も現金のまま封筒に入れ、もう一本手紙をかいて之は会の方へ断り状を出す事にした。

「お母さんすみませんけど一寸速達本局⁽¹⁰⁾迄出してきますからね」

「あゝいつておいでなさい。芳造さんは今夜はお帰りがおそいね」

と母親は、食卓の上に聲にたべさせる料理をならべてゐる。

バスで町へゆく迄も小夜子は、上京した時の椅子から二度もこけおちた事や、上野の東照宮の暗い木かげに句会があるとつれ出されて、誰一人こないでふらくとまたされたり、いろくと思議な目にあつたり、ことに岸先生の句評を見たり、いろんな雑誌を見ると自分の足もとが崩壊しはじめた様な不安な空気を頻りに感じ出した。

子供の時父母と一緒にゐた南の島の思出をたどつて作つた句迄嫌に解釈され、思つたまゝを馬鹿正直にいひ過ぎる小夜子のわるい癖は、八方にも

(10) 当時船場町にあった小倉郵便局か。
富野菊ヶ丘（現小倉北区上富野一丁目）
の久女宅からはバス利用となる。

の笑ひをまき起してゐるに相違ないと感じ出すと、自分の周りに冷めたい批判の矢が射むけられてゐる様で永い間いぢけ却つてゐる彼女は何を書くのも句を作るのももう一際沈黙しなくてはいつ千仞の谷底へなげ出されるか知れない、と急に大きな恐怖に襲はれ出し、何でもかでも此上大恥か、ない前に一と思ひに身を退いて地の底へでもかくれてしまいい度い様な恥しさと、腹立たしさと、自嘲とで興奮し、青ざめてゐた。

ドアをおして、淋しい八時過の郵便局に現れた彼女は二本の郵便を速達にし、岸先生へあて、今日限り引退と思ひきめて乱暴にも電報⁽¹⁾でその由をうつてしまつた。

丁度その日は一月前喜び勇んで何年振かに上京し、岸先生や民子さんにもお目にかゝつて、色々御親切にして頂いた其日なのだつた。⁽¹²⁾

電報をうちおはると、急にせい／＼して帰つてきたが、御飯がすんで新聞を見てゐる芳造のそばで、此頃目のわるい母は、金光教の小さい折本をひらいてだまつて読んでゐるのだつた。女中もない家なので、年寄つた母は、もう二三十年此方台所といふものへをへした事のない体を、つい小夜子の忙がしい時や、留守がちの朝晩気の毒がつて、ぼつ／＼お米洗ひも掃除も厨事も皆してくれるので、小夜子はあべこべに身のまはりの世話一つせず、老先短い母に苦労かけて、手伝つてもらふ事が勿体なくもあり、又気の毒にも思はれつゝ、やはり手伝つてもらふのだつた。

「あら、又あと仕舞ひして下さいましたの、ほつといて下さればよいのに」

(1) 「国子の手紙」には、五月一九日付で「今日限り先生の膝下を退く」という電報が届いたとある。

(12) 「花の旅」は四月一七日から二八日まで。「草稿」には、「四月十八日発行所に虚子先生を御訪問(昌子同道)」とある。「民子さん」は星野立子がモデルか。

と小夜子はかう言ひ乍ら台所から上つてきたが、何にもいはず、新聞をよみふけてゐる夫に、

「お帰りなさい」と一言いつた切り、

「お前ご飯お上りよ。」

と小夜子の茶碗丈のこして並べてある食台を一寸見たまゝ、「エ、何だかいたゞき度くないから」とそのまゝ六畳のへやに引籠つてしまつた。

「小夜子さんもうおやすみよ私もねるから」

と母も心配して一寸小夜子の部屋をのぞいたが、寝てしまひ夫も二階へ上つてしまつた。

小夜子は夜中の二時頃迄もじつと机の前に、今朝きて出た時の着物のまゝ帯もとかず座つてしくしく泣いてゐた。誰に話す人も相談あひてもない、いろ／＼複雑な心地なり重くるしい疑惑を誰かにといてもらひ、聞いてもらひ度のんだけど、只孤りで荒波にもまれ、あゝかこうかと考へ迷ひ出すと、頭が乱れて只もう小夜子は泣けて／＼仕方なかつた。

とう／＼今朝迄一睡もせず、夜があけてしまつたが、丁度今日は夏野氏⁽¹³⁾の亡つた息子さんの忌明に招れてゐたのでゆかねばならぬし、氣もすゝまず、ぐず／＼と沈み込んでゐる所に、昨日の俳句会の奥さん達が、三人でやつて来た。

「まあ先生。私達には何もわかりません。決してソナ事ございません。私達何にも気がつかないのですもの。どうして私達がソナな事思ふものでございませうか。私達は心から先生をおたより申上げて居りますのに」

(13) 「夏野さん」のモデルは久女が指導していた句会の会員・縫野いく代か。縫野は一九二九年久女の弟子となる。三二年発行の「花衣」にも会員として参加。久女が小倉で指導していたかゝり火句会・白菊会の両方に属し、四〇年頃まで交流した。

かう三人は交る／＼玄関口で熱心にいひわけするのだつた。むろんK子も来てゐた。

「あなた方は私に煮湯をおのませになるのですか？」
かうせきこんでいる、小夜子の目はなきはれてゐた。

「先生！ そんな事決してございませんよ。どうぞお氣持お直し下さい。私達はこんなお手紙先生から頂戴いたす筈ございません」

と交る／＼三人にいはれて、小夜子も漸く自分の勘違ひだと思ひ直す様になつた。

皆が帰ると丁度そこに江上がきてゐて、

「あんまりいろ／＼お氣になさらんがいいですよ。今日は先日の句稿を清書してもつてきました」

と風呂敷からぶあつな原稿紙を出し、小夜子が落付かないのでぢき歸つていつた。

「江上さんが芥子の花をもつてきてますよ」

と母親がいふので、台所へ来て見ると、新聞紙にくるんだ色のきたない八重の牡丹げしが、なぞの様に散りかけて流しの上においてあつた。

疲れてもゐたし、気分もふさぐし、人に逢ふのが厭で、氣が進まなかつたが、「でも三郎さんがかはい相だからやつぱり行つて上げますわ。」

と小夜子は髪丈なでつけて、はればつたい顔で白粉もつけず三時過ぎに出かけたのだつた。

ゆうべからのそんな事をきれ／＼におもひうかべ乍ら畠の中をとぼ／＼

歩いてゐる小夜子は、緑や黄の爽かな初夏の景色に包まれつゝも、只敗残者のように疲れきつてゐた。

今朝からまだ一粒のご飯もたべてゐなかつた。十九年の永い年月⁽¹⁴⁾従いてきた岸先生にわれからすねて、そむいて、弟子の人々も振りすて、只孤りすぎな俳句もすてて引籠ろうとする自分が淋しくて涙ぐまれた。

やがて夏野家の玄関へくると

「あゝ先生お待ちしてました」

と羽織袴の主人やお母さんが出むかへてくれた。客はもう大方帰つたあとで男の客丈が四五人縁近くゐ流れてゐるばかりだつた。

「三郎、木村先生がきて下さつたよ」

と夏野氏は床の間にかざつてある中学生姿の三郎さんの写真によびかけるのであつた。仏壇は造花や生花で美しくかざられ、その中に生けるが如き三郎さんが、こつちを見てゐた。お花をもつていざりよつて、線香をあげ、合掌した小夜子は、今迄こらへくしてゐた涙が一時にせきあけて、泣けてく仕方なかつた。袖に顔をあてゝ、肩をふるはして、傍にゐる人目も恥ぢず彼女は只々泣きつづけた。入院中の三郎さんは小夜子の見舞にゆくのをいつも喜んで待つてゝくれた。「病氣が直つたら、おばさんをつれてお魚つりにゆかうか。僕も俳句を作つて、見てもらいますよ。」なんて退院を楽しみにして元気よく笑つたりしてゐたのに、と病人の顔を思ひうかべ、小夜子のたむけた白白合に清らかな童顔をうづめ合掌してゐた寝棺の中のねむるが如きみ仏の姿を思ひうかべ、小夜子のあげた短冊や鈴⁽¹⁵⁾を棺

(14) 久女は一九一六年、次兄赤堀月蟾から俳句の手ほどきを受け「ホトトギス」に投句をはじめた。

(15) 随筆「鶴料理る」(「かりたご」三四四年四月)で、久女は縫野さんの息子を病院に見舞い、持参した「オモチャの鈴」を渡したことを描いている。

中に皆入れてあげた事などくりかへし思ひ出すと、此年わかな仏をいたむ心地でいつぱいだつた。涙はこみあげ／＼恥しいほど泣けたが、そのみ仏をいたむ涙の底には、昨夜電報で突然退いた俳誌かもめ⁽¹⁶⁾に対する十九年間の愛憎と、恩師に心ならず反旗をひるがへす自分自身の深い悲しみと絶望が入れ交つて、只さめ／＼と泣かれるのもあつた。

「先生何にもありませんが、めし上つて下さい」

と言はれて、漸く涙をぬぐつた小夜子は、ばらと芥子の花を壺にさし添えみ仏の方へ花首をむけてあげてから、

「お淋いでせう、今日は早くきたかつたのですけど」

と夏野の細君を慰めながら、一緒に精進料理をたべるのだつた。ゆうべから水一滴も口にしないので、冷めたいそうめんがおいしかつた。

「先生、三郎の写真が出来てきました」

と主人は写真をもつてきてくれた。一枚の方は葬式の日に親籍の人達とこの庭でうつしたものだつた。旅から小夜子が戻つた其日に三郎は逝つたのでお通夜から引つゞいて小夜子は疲れきつてゐた。

「先生はあまりあの時お泣きになつたので、これごらんなさい。まるで七十位のお婆さんの様撮つておいでですよ」

と細君に言はれるほど、其写真はふけておかしくうつてゐた。

「三郎の冥福をいのるために今度お寺に梵鐘をあげ様思つて。今鐘楼をつくらせてます」

「それは結構そうですね」

(16) 「ホトトギス」か。

「六月頃鐘は京都から来ます」

「それはぜひ私にも一つき撞かして下さいましな。三郎さんの追善句会もしたいから。」

小夜子がかう言ふと縁側にゐた人達がチラと笑つて顔を見あはした。

小夜子は三郎さんが植えたといふ石楠花やつゝじの花を眺めやり乍ら、しよんぼり座つてゐたが、

「あゝここにも観音様がかけてありますね」

「エ、三郎が観音様をすきでしたから。これは如意輪かんのん様ですよ」

「まあ私も如意輪観音様を肌身離さずもつてますよ」

と小夜子はふところの守袋から那智山のお守を出して見せ乍ら、親しい此夫婦について昨日のぐちを言つてしまふ。

「先生何事もお気になさらずこのお経をよんでご覧なさいまし。私も三郎がなくなつてから毎日お経をよんでいますよ」

と主人は優しく、観音経をとり出して慰めてくれるのだつた。

小夜子も気がなごやかになつて、けふも留守居の淋しい母に、すきなおさうめんを水筒に入れてもらひ、折づめの白い包をさげて帰る頃は、気分が大分軽くなつてゐた。

宅へ帰つて見ると芳造は刀剣会へ行つて留守で、母がひとり、しよんぼりと、こよひも又金光教の本を燈下ひろげて一心によんでゐた。

「お母さま。お好きなおさうめんを夏野さんで頂いて来ましたからめし上つてごらんないな」

と小夜子は水筒のさうめんを器に入れ、だしを作つて母にもすゝめ、自分も落付いて一緒に夕飯をたべるのだつた。

五月の末に小夜子の母も十ヶ月振りで宝塚の長男の方へ歸つていつた。六月に産をする孫夫婦と母と別居してすむ為めであつた。

夜の海峡を渡つて、甥と一緒に下の関をたつてゆく母の小さな白髪の顔を車窓からのぞいた時、小夜子は、

「お母様、どうぞご丈夫でゐらして下さいまし。またお目にかゝりに屹度まゐりますからね。ほんとに我儘ばかり申上げて永い間いろ／＼有りがたうございました」

かうむせぶ様にいひ乍ら、母のやせて小い肩に手をかけて、撫でるように名残をおしんだ。

珍らしく十月も一緒に住んでいろ／＼と小夜子の心持も生活もわかつた母も淋しげに、

「私の事は心配なさるな。それよりあなたこそ体を大事になさいよ」

としみ／＼言つた。何の孝行もせず身辺の世話もろ／＼せず、あべこべに八十一の母に寒い間も台所迄手伝つてもらひ、毎月物質までいろ／＼と助けてもらつてゐた母の有がたさをしみ／＼と小夜子は、見送つて歸りの連絡船の中でも勿体なく思ひ出して、いつ死ぬかわからぬ老先短い母がせめてもう四五年でも仕合せに長寿でゐてくれる様にと心からいのる〈の〉であつた。

母が出立後は愈々独りで、毎日だんまりの日のみが続いた。時には子供二人からくる手紙の返事を書いたり、二人に送金したりしてゐたが、あれきり二つの婦人俳句会⁽⁷⁾にも一際出席せず、誰ともゆきさせず、来る人もなし、外出もせずたゞ終日六畳にとどこもるばかりであつた。

夕方夫が戻つてくると二人は石ころのようむきあつて静かに箸を動かした。用事があつたりして話が出るとつい根本的な意見の相違から争がおきたり、嫌に引からまつて皮肉や叱言をきくのがつらさについて小夜子は一際沈黙主義でおしとほした。芳造もしいて争ふ事もないと、だんまりでおしとほした。お互年とつて近年は火の様な争も憎みもなくなつたかわり、お互水底に沈めた石のように着してゐた。芳造は新聞をよむとは、こで押した様にうたゝねをする。小夜子は台所をしまつて、六畳の自分の部屋の机にむかふ。

ラヂオも映画もここにはなく、芳造は煙草ものまず、本もよまず只忠実に毎日せつせと自分のしごとに丈はげんでゐた。

「あゝあ。自分は毎日食ふ為めにあくせく働いてゐるのに、お前は自分の個人主義と虚名の為めに下らない俳句ばかりして遊んでられて結構なことでだ！」

時々投げつける様に芳造はかういつて、ピシヤリ／＼と襖障子にあたりちらして二階へ上つてゆく事もあつた。

實際また近年の小夜子きたら、女としては益々ぬけだらけで馬鹿になつてゐた。芳造にも冷淡だつた。夫婦一緒に出かけるなどいふ事も少しも

(17) 前出(13)のかゝり火句会と白菊会か。いずれも詳細は不明。かゝり火句会は三三年一月から三四年五月の句会誌七冊が、白菊会は三五年五月から三六年二月の句会誌七冊がそれぞれ確認されている。

確認されているうち最初のかゝり火句会誌は「高見町官舎にて催す」とあり、前出(5)の橋本多佳子の証言と符合する。毎号例会会場は個人宅が記されており、交互に会員宅で開催されたと思われる。最後の句会誌は昭和九年五月一八日付で、前出(11)電報と同日である。

なかつた。

夫に厭味をいはれつゞけつゝも、彼女は夏布団一つ客用のをつくる丈のさい覚もせず、其金で高い本を時々かつてきたり、好きな香や、草花を買つてきたりした。

「年中遊んでられて結構なことですね。女の子をムダな学校に出したり⁽¹⁸⁾、よけいな旅行をする金があつたら、客用の夜具やつい立のひとも出来相なものだが、我々の家庭では——ああつまらない」

と芳造は不機嫌だったが、良妻でも賢母でもない⁽¹⁹⁾小夜子はだまつて、やはり可愛い姉妹のため、自分の責任丈は刈りとらふ。何と笑はれても、黙つて信じた道へ進まうと考へてゐた。

一週一度の女学校⁽²⁰⁾からのかへりにへとくになつて魚や野菜の風呂敷包をさげて戻つてくる事もあつた。

岸先生からもむろん御返事も来ず、小夜子もがんこに引籠つてゐた。誰もよりつくものもなかつた。覚悟はしつゝも淋しくなると独り観音經をよみ出した。

どういふわけか黒わく付の死亡通知がやたらにとびこんで来たり、俳句の雑誌もひが目で見るせいか変に自分に対する批難のようにも見え、相変らずわけのわからぬ蜘蛛のあみに引かつた蝶々のよう、もがけばもがくほど、益々翅は破れ、くもの糸にまきつかれる様な不安と幽鬱^{マヤ}に襲はれた。一体俳人の名のみみとか、生年月日とか生れ故郷とか句のうちにひそむ意味とかを一々比較研究して見るひまもなく、そんな面倒くさい事は一際き

(18) 長女昌子は二八年に京都の同志社女子専門学校（現同志社女子大学）へ、次女光子は三年に東京の女子美術専門学校（現女子美術大学）へ、それぞれ進学・転居している。学費は久女が負担した。「日記抄」等で、娘たちに教育を受けさせたいという思いと、学費・仕送りの負担について繰り返し語っている。

(19) 久女が卒業した女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属高等女学校は良妻賢母教育を理念とした。

(20) 久女は二三年から、私立勝山高等女学校（二七年までは私立勝山高女学校）で、現美萩野女子高等女学校。当時は小倉市堺町）で図画と国語を指導していた。

らしい小夜子だつた。

けれども日毎に目に見えぬ身辺異変に彼女は戦々兢兢として相変らず悩まれたつた。

「汝等当に一心に觀世音菩薩の名号を称すべし、この菩薩はよく無畏をもつて衆生を施したまふ。

——諸の方所に應じて弘誓の深きこと海のごとく磨却にも思議されず、多の千億の仏に侍へて、大清淨の願を起せり——」⁽²¹⁾

ねむられない夜、小夜子は起き上つて又觀音經をしづかによみつゞけた。暗深い人生の旅路をとぼくと孤り迷ふてゐる様で涙がこぼれたが、何事も疑はず一際を信じてゆけばやがて知らず行手に光明がうまれると思ひ返した。

或は王難の苦にあひ、刑に臨みて寿終らんと欲するに、かの觀音の力を念ずれば刀ついで段々におれん——⁽²²⁾

釋よみながら静座して、数珠をかけ、一心に味読してゆく時、彼女の心には、たとへ首をはねられ、須弥山から追ひおとされても「彼の觀音の力を念ずれば日の如くにして虚空に住す」⁽²³⁾といふかたい信念さへあれば今更何を怖れる必要があろうか。といふ安心がわき出した。

はや／＼我首をうちたまへ！

と瀧の口の危難に日蓮上人⁽²⁴⁾は、自ら首をさしのべて白刃のもとに泰然と座して読経した。世をも人をもおど怖れわれから疑心暗鬼を起して逃げまどふ自分の弱さ。筆をとつては思ひ上つて人をきづつけ背かせ、自身の

(21) 觀音經より。「汝等应当。一心称觀世音菩薩名号。是菩薩。能以無畏施於衆生。汝聽觀音行。善應諸方所。弘誓深如海。歷劫不思議。侍多千億仏。発大清淨願」

(22) 觀音經より。「或遭王難苦 臨刑欲寿終 念彼觀音力 刀尋段段壞」

(23) 觀音經より。「或在須弥峰 為人所推堕 念彼觀音力 如日虚空住」

(24) 日蓮の龍ノ口の法難のことか。

立場もわすれてつゝしみなく言動した事が、世間に疑惑を起させ、人々の批難と嫉妬をまき起してゐたことにふと気がつく、誰が悪いのでもない。皆自分の醜い表裏二面の妄執だった。

へやの中にかゝげてゐる白衣観音のみ姿も、一枚の絵として眺れば、線太く妙に艶々しく、又ま心から礼拝すれば、一際清浄無垢、たとへ此絵をののしられたとしても怒る必要もなかつたのだつた。

蓮華の上に安座して六びの御手の一つに蓮の花をさゝげ、他のみ掌には如意宝珠をのせ、他の一つのみ手には、数珠をさげもちたまふ、うるはしい如意輪観音のお守を安置しまゐらせて、ひたすら自らの罪却消滅。八万四千の衆生みな功德あらしめ給へと、今は心から祈念せずにはゐられない小夜子だつた。

外面如菩薩、内面如夜叉。

怒り易く、迷ひ疑ひ、毀誉褒貶に悩されつゞけてゐた醜い自画像を鏡に映すが如くまぎ／＼と感じ出すと、小夜子は増上慢の角もずた／＼に折れて、まづ何よりも岸先生に今日までのお詫がしたくなつて来た。

紙をのべて、書いては消し、／＼おわび状をかく彼女の頬はぬれてゐた。恩師の慈愛になれて只桜をめて月をめ「づる芸術」気分⁽²⁵⁾にのみ浸り我ままのありたけをつくした自分を、しみ／＼と師の足もとにぬかづいて御わびもし、存分に鞭に叩かれ叱られたかつた。幾度か師にそむき裏切り不平がましく反抗していつた不遜に気がつく、こんな我儘者をも尚、子の如く愛し、育てて下さつた有がたさに小夜子は、泣けて／＼しかたがな

(25) ここは原資料では、当初「月をめづる芸術をいふ立場にのみ浸り」と書かれ、「づる芸術をいふ立場にのみ」が見え消しされ「月をめ気分にのみ」となるよう書き直されている。これでは意味が通らないので、「づる芸術」は誤つて消されたものか。

かつた。涙は魂をなごやかに洗ひきよめてくれた。かの俳句会の婦人達にも高慢ちきをわびたかつた。

芸術くくと自惚れ乍らもまだ一句のうらにひそむ真意すらかみしめる力がなく、けふ迄めくら減法で歩んできた芸の浅さをはぢもした。鳳蝶をめでゝは鳳蝶をよみ、桐の花の美しさに心ひかれては花桐をよみ、菊枕をつくつて師へ奉る⁽²⁶⁾、四季につれて自由によむ事は自由ながら、又地上にすむ人間としても少し自重して行動すべきであつた。花のお江戸にのそくと出かけて行つて、木曾の冠者の如く、椅子から墜落してガラスを割つたり、伝統をしらず盲の選句をしたりしてすましてゐた花の旅の失敗をおもひ出すと、弥次喜多そこのけのおかしき恥かしさに顔が赤くなつた。

訪ねてくる人もない隠栖にけふもたゞ孤り、小夜子は端座してじつと考へつゞけた。

窓外の景色はいつかすつかり青葉となつて、山影もみどりのかなたにおほひかくされ、庭前も只あをくくと草木が茂りかはしてゐた。

狭い庭ながら軒近くには槐が枝をひろげ、その下にはうすべにの葵が勢よく咲き、露が茂り、ばらが咲きみだれ、甘草が樺色の明るい花をつけてむかう向きに佇んでゐた。

その向ふには五六本の百合が大きな純白の筒をおもひくにかしげて芳香を漂はし、堀ぎにはせ高くのび揃つた夏萩や青すゝきの幾株かを背景にして、白と藍色の紫陽花が二株ことしは小さい毬ながら花を沢山つけて

(26) 三二年一月、久女は虚子に菊枕を贈る。

やゝ愁はしげに淋しい花をゆりうごかしつゝあつた。

中背の松。野桑、ぶどう。茗荷、山吹、しゆろ、いてふ。菊、沈丁、日まはり、石路、すみれと其他かずくの植木が花ずきの彼女と知つてくる人からもらふので今は、二尺ばかりの径をあけてあるばかりで、春秋につぎ／＼何かしらひとりで咲きひとりで散つてくれた。大水鉢には苔をぬきんでた菖蒲、河骨、ひつじ草まであつた。

其中でも樺色の明るい甘草と、白百合と、藍色の濃紫陽花との三色が美しい対象をもつて、緑の庭面にうき上る様はことに印象ふかく眺められた。

ソロモンの榮華の時だにもなほ此花のよそほひにしかざりきと、野の詩人クリストは百合の美を賛美してゐるが、それすらやがて明日は衰へる花なのだ。

百合の清楚と紫陽花の清艶と二つ乍ら私は嫌ふ事は出来ない。百合が彼女であり甘草が彼で、ばらは誰、などと一々人間にむすびつける必要もなく、世のき譽褒貶には一際無関心で自分は百合の美をたゞえ、紫陽花を愛し、甘草をよめばよい。青眼鏡でみれば皆青くみえ、赤い眼鏡で見れば純白な百合も赤くみえる。

自分は今まで何を怖れ、何をためらつてゐたのか？

百合はたゞ白く風にゆれ、紫陽花のまりは実にすばらしい寶石の様な碧さとうるみ、つめたさ、うす紅色とのふくざつな七色の変化を見せてもれ上り、其清艶なすがたを、几帳のかげにうつむく王朝の美女のように風に

(27) マタイによる福音書六章二九節より「しかし、言つておく。榮華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾つてはいなかつた。」「新約聖書、聖書協会共同訳」「花衣」掲載の文章などでもソロモンへの言及が散見される。

うなづきゆれあふてゐる。花それ／＼のもつ美しさ、花鳥草木を人間にむすびつけて考へるのもよし。花丈の美を単純に眺めて喜ぶのも又可。いづれも尚人々の自由でよい。

遠慮してよみたい材料もよみえず、一々自分を偽るとしたら、手も足も出ず、世にこび師にこびて句作するとしたら。つぎはぎ細工のよふな俳句となつて千載のうらみをのこすだろう。唯正直に自然の前へぬかづき、造化の神秘をさぐればよいのだ。

地球を丸いといひはつて首をはねられた学者もあり、大罪人禅海は二十何年間、村人から冷笑され、敵とつけねらはれつゝも、遂に耶馬の洞門を開いて大願成就した⁽²⁸⁾。

世間から笑はれ、そむかれ、唾されても気狂遊女とののしられても、手足の爪がはがれても、獅子の子の様千仞の崖へつき落されてもやはり自分は自分の手足を力としてどこまでも歩んでゆかねばならない⁽²⁹⁾。細川九曜の紋どころであろうが、あふひの紋であろうが⁽³⁰⁾安心して、只日の如く虚空に安住すべし⁽³¹⁾。之でいいのだ。

寵辱驚かず。庭前花開き花落るを見る。

晴天朗月。

一時は寂しくとも万古の凄凉を取ることなかれ。⁽³²⁾これでいいのだ。小夜子のかう考へつめて大きく呼吸しつゝ立ち上つた。

玄海を渡つてくる六月の風は、さわやかに庭前の草木をゆり動かし丘を吹きすぎた。

(28) 菊池寛「恩讐の彼方に」は一九年一月『中央公論』発表。教科書にも採択されるなど、広く親しまれていた。

(29) 「花衣」の「削刊の辞」にある「芸術」と家庭も顧ず、女としてゼロだ。妖婦だ。異端者だ。かう絶えず、周囲から、冷めたい面罵を浴びせられ、圧迫されて、唾されて、幾度か死を思つたこともある」を思わせる。

(30) 旧藩主の家紋からそれぞれ小倉と東京を示すか。

(31) 観音経より。「如日虚空住」、前掲。

(32) この三行、菜根譚六九、七〇、前集一より。それぞれ、「寵辱驚かず、閑に庭前の花開き花落つるを見る。(後略)」、「晴天朗月、何れの天か翱翔すべからざらん、而るに飛蛾は独り夜燭に投ず(略)噫、世の飛蛾鴟鵂たらざる者は、幾何の人ぞや。」「道徳に棲守する者は、一時に寂寞たり。(略)一時の寂寞を受くるも、万古の凄凉を取ることなかれ」

企救^{ききう}の山野をうづめる草木の深緑は、すばらしく日に輝きおどり、麦は色づいて収穫をいそいでゐた。

この田園の景色を縁側に立ち上つてしみく見渡してゐた小夜子は、五月以来の不安や幽愁をあとなく投げすて、いきくと、夕方の厨ごとにとりかゝるべく静かに台所の方へ歩み出してゐた。

(九年六月十六日記)

(おの よしみ 学芸員)

【参考文献】

- 杉田久女『杉田久女全集』立風書房、一九八九・八
石昌子編『杉田久女遺墨』東門書屋、一九八〇・四
『杉田久女遺墨(続)』東門書屋、一九九一・九
『杉田宇内・杉田久女 追悼アルバム』私家版 一九九九・一一
『最後の久女』杉田久女影印資料集成 私家版 二〇〇三・一二
『定本高浜虚子全集』毎日新聞社、一九七五・一
坂本宮尾『真実の久女——悲劇の天才俳人』藤原書店、二〇一六・一〇
増田連『杉田久女ノート』裏山書房、一九七八・四
『久女(探索)』(付)久女未収録俳句拾遺 櫻の森通信社、二〇一四・一二
橋本多佳子『久女のこと』橋本多佳子全集 第二巻 立風書房、一九八九・一一／初出『俳句研究』一九五〇・九
池上不二子『俳句に魅せられた六人のをんな』近藤書店、一九五七・二
『花衣 俳人杉田久女』展図録 北九州市立文学館、二〇一一・一一
今川英子『杉田久女から高濱虚子へ』二〇一三・四

中西由紀子『杉田久女指導句会誌『かゝり火』について』二〇一六

・三

『所感』(『俳句月刊』一九三三・三)——廃刊の心地をきせしもの』二〇一八・三

『杉田久女未完の「句集花衣」の構想について』二〇一九・三

菊池寛『菊池寛』文藝春秋、一九七七・一二

加藤通夫『禅海と「青の洞門」のすべて』一九八六・四

片山宏行『菊池寛のうしろ影』未知谷、二〇〇〇・一一

田鎖数馬『菊池寛「恩讐の彼方に」の改作について』二〇一四・三

守屋洋『新釈 菜根譚』PHP研究所、一九八二・四

今井宇三郎『菜根譚』岩波書店、一九九一・一

福岡県立小倉南高等学校『星霜 六十五年史』一九七一・三

『福岡県教育史』一九五七・三

『小倉局管内 電話番号簿』一九三〇

『北九州市史 近代・現代 教育文化』一九八六

なお、翻刻および本稿の執筆にあたり、中西由紀子氏の協力および教示に与りました。

觀自在菩薩

龍野須臾子

今し万常つて貰つた真紅の牡丹花子とばら
の色をさけて園藝學校を出た小娘子は、土埃
をあげながら、とぼくと田圃道を歩いて行
つた。

春は背筋のゆるい緑の穂波を漂はし野苺
が川岸にちぶさり咲いて、初夏の——爽やかな
天気がつたが、昨日の夕暮もまだ一粒のほ
ろも口に残らず、やがて一瞬としない極度の

【資料紹介】

劉寒吉 昭和三〇年ラジオ小説版 「祇園太鼓」及び、自筆原稿「祇園太鼓」解題・翻刻

稲田 大貴

1 序

本稿では劉寒吉（一九〇六―一九八六）の、昭和三〇年ラジオ小説版「祇園太鼓」（以下、ラジオ小説版と表記）と、自筆原稿「祇園太鼓」（以下、自筆原稿版と表記）を紹介する。

自筆原稿版については、拙稿「文学と小倉祇園太鼓」⁽¹⁾において、あらずじと一部引用で紹介したが、その後、ラジオ小説版が新たに発見された。両作品は同タイトルではあるものの、全く別の作品であり、制作年代も異なるものであると考えられる。

ラジオ小説版はガリ版刷りの全二四ページの冊子で、表紙部（図1）に「ラジオ小説（昭和三〇年七月十二日）」の日付と「祇園太鼓」のタイトル、劉寒吉の名前が記され、裏表紙（図2）にJOSK（NHK小倉放送局）のマークが刷られている。

自筆原稿版は、原稿用紙二二枚、掲載誌は未詳。脚本仕立てとなっており、おそらくは、ラジオドラマの脚本として執筆されたものであろう。しかし台本として印刷されたものは見つからない。成立年代は、作中の時代設定が小倉黒人米兵脱走事件から一〇年後に設定されていること、また小倉祇園太鼓の競演会の会場が、「天守閣」の下とされていることから、小倉城天守閣が再建された一九五九年一〇月以降、おそらく、一九六〇年に書かれたものと推定される。

自筆原稿版が何らかの形で発表されたか否かは決定できないが、少なくとも五五年に一度、ラジオ小説として発表されたものがあつた上で、新たに構想されたものであることは間違いない。この二作の差異を、作中の小倉祇園太鼓の機能から検討し、小倉祇園太鼓をテーマとした物語を一度書いた劉が、なぜ再び、同タイトルでの創作を試みたのかを考えてみたい。

2 贖罪と浄化

ラジオ小説版のあらすじは以下の通りである。

小倉生まれの良太郎は近くに住む小牧美代に恋心を抱いていたが、美代の家は家業に失敗し、一家離散。美代は大阪に働きに出た。良太郎は悩んだ挙句、送られてきた葉書を頼りに美代を探しに大阪へ向かう。しかし美代は見つからず、金も尽き、放浪していたところに二人の男に声をかけられる。二人は良太郎に食事を奢り、一緒に映画を観、酒を飲む。二人が席を外す間、うとうととした良太郎は美代の夢を見、望郷の思いに駆られる。戻ってきた二人は、良太郎に仕事を手伝うようにいう。その仕事は強盗であつた。脅され、逃げられなくなった良太郎は見張りを手伝う羽目になり、図らずも強盗の一味になってしまった。二人と別れ、小倉に帰ることを決意するが、強盗事件は大きく報じられ、二人は逮捕、自分にも警察の手が迫る。小倉に戻った日は、小倉祇園太鼓の日だった。逮捕されることを予見しながら、良太郎は太鼓の名人である父と参加する。父の優勝を見届け、良太郎は父に罪を告白し親不孝を詫げる。刑事の来訪で察していた父は、良太

郎を励まし、刑事のもとに向かう良太郎を見送った。

この物語における祇園太鼓は、贖罪のきつかけとなつてゐる。巻き込まれ、脅されたとはいえ強盗の手伝いをしてしまった良太郎は、両親ともしかしたら戻つてゐるかもしれない美代に会いたい一心で小倉に戻る。父とともに太鼓を叩き、美代の不在を確かめたのち、自ら刑事のもとに赴く。自ら罪を認めたことは、良太郎にとつては救いでもある。罪を贖うという救い、本作における祇園太鼓はそのような役割を果たしている。

一方、自筆原稿版のあらすじは以下の通り。

太鼓の名人である六造には牧江という娘がいる。牧江は一九五〇年の黒人米兵脱走事件のとき、凌辱され、それ以来、家を出なくなった。牧江には良一という恋人がいたが、その事件をきっかけに出奔してしまった。それから一〇年、祇園太鼓の日小倉に戻ってきた良一は太鼓を打ち終え、牧江のもとを訪れ、求婚する。涙を流し、受け入れる牧江。それを見届けた六造は一世一代の祇園太鼓を打ち始める。

本作については、小倉で起こった黒人米兵脱走事件の誘因の一つとされた小倉祇園太鼓^②に対して、その

事件の被害に遭った牧江とその恋人である良一を復讐させたものとして描き、最後の六造の太鼓は、脱走事件を含めた物語全体をカタルシス（浄化）と導く役割を果たしている。

二つの「祇園太鼓」は、登場人物の名前が非常に似ている。ラジオ小説版の小牧美代と自筆原稿版の牧江、ラジオ小説版の良太郎と、自筆原稿版の良一と太郎（牧江の弟）。このことから、劉が自作を下敷きにして、自筆原稿版を執筆した可能性が窺える。

両作において、祇園太鼓は物語中でそれぞれ、贖罪と浄化という役割を担っている。この二つは、ある出来事が解決の方向に向かうという意味において相似形である。にもかかわらず、同じタイトルの二つの物語が描かれたのはなぜか。この二つの「祇園太鼓」の成立時期の間に横たわるのは松本清張『黒地の絵』（光文社 一九五八年六月）の刊行である。祇園太鼓の音色を、黒人米兵脱走事件を引き起こした原因の一つとした『黒地の絵』の解釈に対する、劉寒吉の応答である可能性は、先の論考^①においてすでに指摘した。劉が、「祇園太鼓」について一度書いたにもかかわらず再び書いたのは、清張が『黒地の絵』で示した解釈に

よって生じた祇園太鼓に関する言説に向き合う必要を感じたからではなからうか。それは、清張の解釈を否定するのではなく、包み込み、昇華させるかたちで表現されている。

以下、劉寒吉が著した二つの「祇園太鼓」の全文を紹介する。

（いなだ だいき 学芸員）

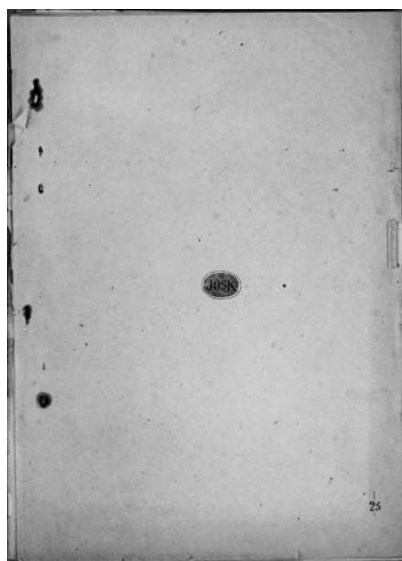
【注記】

- (1) 「小倉祇園太鼓別冊」〔北九州市文化財調査報告書第一六七集 二〇二〇年三月〕
- (2) この解釈は、松本清張『黒地の絵』（同前）において示されたものである。

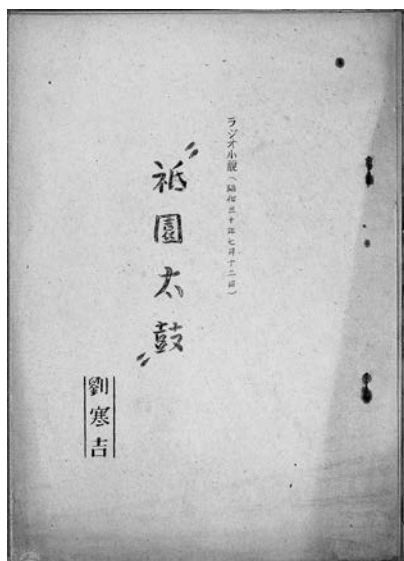
【凡例】

台本・原稿の翻刻は次の方針に拠る。

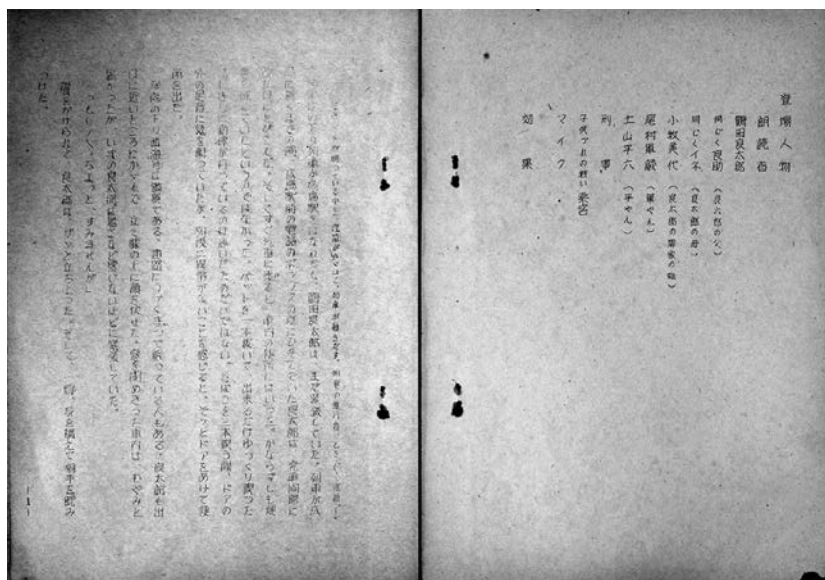
- 一、旧字体は新字体に、異体字は通行字体に適宜改めた。
- 一、仮名遣いは、原稿の通りとした。
- 一、削除部分は、原稿の通り削除し、本文に記載していない。
- 一、挿入は原稿の指示の通りとした。
- 一、ルビは原稿に指示があるもののみとした。
- 一、本文中に、今日の人権意識に照らして不適当な表現・語句があった場合でも、原文の芸術性・歴史性を考慮してそのままとした。



(図 2) ラジオ小説版裏表紙



(図 1) ラジオ小説版表紙



ラジオ小説版 1 頁目

【翻刻・昭和三〇年ラジオ小説版「祇園太鼓」】

ラジオ小説（昭和三十年七月十二日）

祇園太鼓

劉寒吉

登場人物

朗読者

鶴田良太郎

同じく良助（良太郎の父）

同じくイネ（良太郎の母）

小牧美代（良太郎の隣家の娘）

尾村軍蔵（軍やん）

土山平六（平やん）

刑事

子供づれの若い乗客

マイク

効果

発車ベルが鳴っている中を、汽笛がひびいて、列車が動きだす。(列車の進行音、ときどき、汽笛。―)夜更けの下り列車が広島駅をはなれても、鶴田良太郎は、まだ緊張していた。列車が広島に着くまでの間、広島駅前の電話のボックスの陰にひそんでいた良太郎は、発車間際に改札口にとびこんだ。そしてすぐ汽車に乗ると、車内の便所にはいった。かならずしも便意を催していたというのではなかった。バットを一本抜いて、出来るだけゆっくり喫つた。しきりに動悸が打っているのは急いだためではない。たばこを三本喫う間、ドアの外の足音に気を配っていたが、別段に異常がないことを感じると、そつとドアをあけて便所を出た。

深夜の下り西海号は満員である。通路にうづくまつて眠っている人もある。良太郎も出口に近いところにかぐんで、立て膝の上に顔を伏せた。窓を閉めきつた車内は、むやみと暑かつたが、いまの良太郎は暑さなど感じないほどに緊張していた。

「もしく。ちよつと、すみませんが」

声をかけられて、良太郎はサツと立ち上つた。そして、一瞬、身を構えて相手を睨みつけた。

「やあ、すみませんな。ちよつと通して下さい。」

それは子供づれの若い乗客だった。

良太郎は道をあけて通すと、また、かぐみこんだ。便所に行つたらしい若い乗客がもどつてゆくと、それから誰もやつて来なかつた。十分、二十分、三十分。良太郎はやつと緊張を解いた。すると、これまでの数日の疲れが、一時にどつと襲つてきて、つい、うとくと眠つてしまつた。

ほんのわずかな間しか眠らなかつたような気がしたのだが、眼がさめると列車は下関に着いていた。〈山陰方面乗換。下関。下関。山陰方面乗換〉とマイクが呼んでいる。売子の声。―

もう朝だった。空いた席に掛けると、窓の外に、朝の陽を浴びた海峡がきら／＼と光つて、向うに門司の街が美しく浮かんでいた。良太郎は窓を開けて、

「おい。新聞をくれ。うん。朝刊、みんなくれ」

そのときである。新聞売りのうしろを通りかゝた男が、ちらとこちらを見た。良太郎も新聞を受け取ろうとして、ふとその男と視線が合った。男が良太郎を見たのは、ほんのちよつとだけで、次の瞬間

には、なにでともなかったやうに、通りすぎていった。よれよれのジャンパーの前をはだけて、汚れた鳥打帽をかぶり、鼻の下から顎のあたりにかけて無精たらしくヒゲをのびした五十才くらいの男である。

良太郎は新聞をつかんでサツと立ち上ると、その男の去つたのとは逆に車内を前の方にむかつてあるいた。そして割合いに混んでいる箱の一隅に腰をおろすと、急いで新聞をめくつた。そして社会面をあけると、良太郎はにわかにかた／＼と顫へだした。ひとつの新聞を棄てると、つぎの新聞を読んだ。果して三つの新聞とも同じやうな記事が大きく三段抜きで報道されていた。良太郎は顔から血の気がひいてゆくを感じた。こんなに早く終局がやつて来ようとは予測しない事だったが、いづれにしても、時間の問題にすぎないことは、あのときからわかつていたのだ。

「大阪難波の質屋強盗主犯逮捕さる」という見出しの記事であつた。

強盗をはたらいた二人の男が尾村軍蔵と土山平六という名前であることを、良太郎ははじめて知つ

た。新聞の写真を見ると、額に傷のある方が尾村で、背の低いドモリの男が土山ということであつた。捕つたのは事件後四日目で、神戸の特飲街に登樓中に寝込みを襲われたと報じられている。さらに、も一人の共犯、九州生れの通称、太郎は東京方面に逃亡した様子だという当局談が発表されている。あの悪夢のやうな一夜の出来事が、どつと音を立て、太郎の頭によりがえつてきた。

あの日、一年ばかりの放浪の果てに、鶴田良太郎は大阪の天王寺公園のベンチに寝ころんでいた。

「おい。あんさん、ちよつと起きてんか」

いやというほど尻株をばげしく蹴とばされたのに、びつくりして、起き上つた。

「何をしやる」

と、さげんだつもりだったが、二日間も飯を食べない良太郎の声は惨めなほど細かつた。

「ハハハ……。そんなに怒んなや。空き腹のルンペンやな。通りがかりに、きのうから見とつたんやが、きのうからけふまで、まる一日、ようまあ、寝とられもんやなあ。」

額にうすく古い刀痕のある二十五六の背の高い

男である。

すると、その横に立っているずんぐりとした体つき
きのルンペンがいった。

「ぐ、軍やん。こここないに、ヒヨロ／＼にした奴、
つゝ使い道に、ななならへん■」

「いや。こないなヒヨロ助でも、案外、やるときは、
やるもんや。……おい。飯、食わしたるか。」

「え、飯。飯ですか！」

「うん、飯や。食いたけりや、ついて来いや」

考える余裕などあるはずはなかった。良太郎はよ
ろ／＼と歩き出した。無一文のまゝ、木賃宿をたゝ
き出されて三日目であった。頭がぼうと霞むほど、
はげしく飢えていた。二人の男から一膳飯屋に案内
されると、夢中になって、井飯を三杯もかきこん
だ。地獄で会った仏みたいに、男たちを拝みたいや
うな気持だった。

「よう食いくさる奴ぢやのう。……もう、えゝんか。
もう一杯やらんか」

「いや。おかげで腹一杯になりました。ありがとうご
さいました。」

「お前、どこから来たじや」

「九州です。九州の小倉です」

「ふーん。九州か。さうか。お前、どや。金儲けした
いことないか」

「へえ。仕事にあぶれて暇なからだです。どんなこと
でもします。どうぞ、お頼みします」

「まあ、たばこでも喫えや。ほら、一本。洋モクやで」

「どうもすみません」

満腹のあとのたばこは、全身をくびれさせるほど
うまかった。さうして、この井飯とたばことは、絶
対の威力を揮つて良太郎に服従を命じた。それから
の良太郎は二人の命じるまゝに機械人形のやうに
うごいた。

「仕事がすんだら、また、たらふく飯、食わしたるわ。
ま、それまでは、映画でも見て、暇つぶしするか。の
う、平やん。どや。チャンバラでも観に行くか」

「よ、よかろう。お、おい。お前、なんちゆう名や」

「まあ、えゝわい。ルンペンの名なんか聞いたつて、
しよおないわ」

「いや。太郎です。太郎といゝます」

とつさに、出まかせの名を名乗った。さすがに鶴
田良太郎という本名をいう気にはならなかった。

「太郎。太郎、次郎、万太郎―か。なら、太郎やん。ついで来い」

そのまた附近の三流館にはいつて映画を観て、出ると、もう夜だった。そこから電車で難波まで行つて、また簡易食堂に入りこんだ。

「さあ、前祝いや。一杯ひっかけよう。しかし、あんまり酔うたらあかんで。太郎やんも泡盛で、一杯やれや」

「はあ。すみません」

腹いっぱい飯を食つたり、酒を飲んだりするころなど、最近のうらぶれ果てた良太郎には、まったく考えられないことだった。良太郎は、まるで夢を見ているような気持で泡盛の Copp をなめた。強い酔いが、カッと体じゅうを馳^マけめぐつた。

「ほんなら、太郎やん、ちよつと、こゝに待つていてんか。わてら、ちよつと出てくるけど、すぐに戻つて来るよつてな。えゝな。ヒヨロ／＼と出て行つたらあかんで」

「はあ。そうですか。じゃ、こゝで待たしてもらいます」

「おい。平やん。行こう」

「うん。」

二人が出て行くと、急に良太郎は睡む氣に襲われた。うと／＼眠りながら夢をみた。良太郎の夢には、きまつて美代があらわれた。小倉の良太郎の家の隣りに住んでいる小牧運送店の娘であった。運送店といつても、一台しかないオート三輪車で小規模の運送をやっているにすぎなかったが、主人が運転事故でひどい負傷をして以来は、ほとんど仕事はしなくなつた。良太郎と小牧美代とは、はつきり約束したわけではなかったが、良太郎は美代が好きだった。父と一緒に指物職人をしていた良太郎はまだ父にも母にも、美代にも云い出しきらなかったが、ひとりで、美代を結婚の相手と決めていた。切れ長の目に、眉の美しい美代は、良太郎にとっては幼いときからの友達というよりも、もつと深く心に刻みつけられた存在だった。それだけに、小牧の一家が主人の怪我がもとで暮しが立たなくなつた末に、周旋人の手によつて、美代が大阪に働きに出ると、良太郎は、もう立つても居られないほどに悩み苦しんだ。美代から来た一枚の葉書をたよりに、大阪へ来て、その家をたづねておどろいた。それは一

見してアイマイ屋とわかる特飲店だった。しかも、もう、そこには、美代はいなかった。それから良太郎の放浪がはじまった。一ヶ月、二ヶ月と、経ったが、良太郎は小倉に帰らなかつた。ひたすらに美代を求めて、大阪があるき、京都に行き、神戸をさまよい、ついには、その日の宿さえ持たない野良犬のような生活に堕ちてしまったのである。良太郎が美代と会うことが出来るのは夢の中だけである。二人の男から飲まされたそのときも、良太郎は美代の夢をみていた。しかも、その夢の中では美代は小倉の家に帰ってきていた。良太郎が自分の家の前に立っている、美代がやつてきた。昔のように美しい眉の女だが、ひどく顔にやつれが目立つた。

「良ちゃん。朝顔の花が咲いたけ、見に来んね」

「どうしとつた。美代ちゃん。びつくりするで。どこに行つとつた。幽霊やないかな」

「ホホホ……。なにをねぼけとるのよ。昔から、ちゃんと、この家に居るやないの」

「さうかなあ」

「そんなとぼけたこといわんで、うちの裏庭においでよ。朝顔がとても、すばらしいのよ。」

「よし。そんなら、すぐ仕事を片づけて行くよ。ちょっと待つてくれ」

「おいおい。太郎やん。太郎やん」

と起されて、良太郎の夢は、そこで切れた。良太郎の胸の中に、淡く望郷の悲しみが湧いて来た。ひさしぶりでみたふるさとふるさとの家のたたずまい。さうして、もしかしたら家に帰ってきているかもしれない美代。帰れたかつた。たゞ一途に小倉に帰りたくなつた。

「ありがとうございました。私は、これから帰ります」
「なんや。こいつ。とぼけやがつて。どこに去いにくさるんや」

「九州です」

「とととぼけんや。ぜぜ銭、持つとんのか」

良太郎ははッとした。そして、うなだれた。その通りである。一円いちえんの金だつて持つてゐるのではなかつた。

「阿呆やな。お前は。もう一時間もすれば、しこたま銭くれてやる。そしたら、その銭で九州でも薩摩でも、どこいなりと大手を振つて行くがえゝわ。まあ、あて

だちに、一緒についてくるがえゝわ」

「出、出よう。おお遅うなる。いい行こ」

「うん。そろ／＼出かけよう」

もうずいぶん夜が更けていた。電車道を通った
り、暗い裏通りを抜けたりして、路次の角に面して
いる家の前まで来た。人通りも絶えてしまつて、遠
くで支那そば屋のチャルメラの音がひゞいていた。
背の高い軍やんの呼ばれる方の男が低い声で良太
郎にいった。

「おい。今更逃げたら承知せんぜ。えゝか。おれたち
は、これで三犯の全科者じゃ。どこで会うても、お前
の顔はよう億^{ママ}えとるけ、こゝで逃げるようなことをし
たら、バラしてやる。さう思うとけ。お前は見張り
や。デカスケが来たら、合図せい。三十分位の辛棒や。
その代り分け前は奮発してやる」

良太郎は、一度はびつくりしたが、やがて観念し
た。知らず知らずのうちに強盗の仲間にはいつてい
たのである。

二人の男は馴れた身のこなしで、たちまちのう
ちに、黒い板塀を越えて屋敷の中に消えていった。良
太郎はガタガタと顫えてきた。妙に口の中が乾いて

きた。塀にピッタリと身をつけて、路次の角にうず
くまつていた。塀にさえ切られて、家の内部はう
かゞえなかつたが、あたりはしんとして、物音ひと
つ聞えない。犬が吠えているのが、ずっと遠方から
きこえている。チャルメラの音も、まだつゞいてい
た。雨はしだいにはげしくなった。良太郎は逃げる
なら今だと思つた。雨の中を逃げて、明日はまたど
こか遠くで野宿してさえいれば、この連中に見つか
ることもあるまい。さう考えていると、しだいに雨
がひどくなるにつれて、雷が鳴りだした。陰々とし
て稲妻が光つた。雷は深夜の天地を引き裂くかのよ
うに、すさまじく、とゞろき、ひびいた。良太郎は
思わず立ちすくんだ。全身びつしよぬれになつて、
強盗の手助けをしているという恐れと、自分を叱り
つけるかのように天地にとゞろく雷鳴への恐怖の
ために、眼の前が黒くなつて、今にも倒れそうに
なつた。そのときである。板塀の上から二つの影が
飛び下りた。

「急いで走れ」

軍やんが先頭に立つて走り出した。すぐそのあ
とからドモリの男と、つづいて良太郎が馳^{ママ}けていつ

た。どしや振りの雨である。暗い路ばかりを選んで十分ほども雨の中を走りつづけたところで軍やんが立ち止った。

「おい、太郎。お前には、これだけ、やつとく。おれたちは、これから紀州の方に逃げる。お前はどないする」

「はあ。東京に行きたいと思うとります」
「さうか。そんなら、こゝで別れる」

二人の男たちは、通りかゝったタクシに乗って去った。良太郎もタクシを拾うと大阪駅に行つたが、東京に行きたいなどと言つたのは出まかせの嘘だつた。しかし、そのまゝ、九州に帰ることには危機を感じた。しかし小倉に帰りたいという一念には変りはなかつた。ひとまず岡山まで行つて下車し、そこで一日過ごし、さらに広島に行つて、二三日、様子をうかがつた。その間に、新聞はしきりに難波の強盗事件を書き立てた。押し入つた家が質屋であつたことも、良太郎ははじめて新聞で知つた。新聞の様子では犯人はまだ捕つてはいなかつたが、良太郎は、なにか網がしだいにしぼられて来ているような危険を感じてならなかつた。しかしあの大阪

の簡易食堂で夢をみたとき以来、小倉に帰りたいという思いは、良太郎の胸を、もはやどうしようもないほどにはげしく締めつけた。

広島で新聞をみたときに日附に気が付くと七月九日だつた。それまでの良太郎にとっては、月とか日とかは、まったく意識になかつたが七月九日という日附は、これまでになく良太郎を強く打つた。七月の十一日と十二日とは、太鼓祇園という呼び方で有名な小倉の祇園祭の日であつた。しかも明日の九日は、小倉で名うての太鼓打ちの名人として知られている父とともに、良太郎が毎年のように参加していた祇園太鼓の競演会の日にあたつていた。小倉の全市をあげて各町内から繰り出された山車^{だし}を圧して、良太郎の町内の太鼓のひゞきは、水際立つて美しかつた。華やかな競演会の思い出が浮かんできると、良太郎は、まるで憑かれた人のように汽車にとびのつた。夢にみた通りに、もしかしたら、小牧の美代も帰っているかもしれないと思つた。そのようにして乗つた汽車だつたが、下関駅で買つた新聞で、あの雨の夜の二人がつかまつたことを知ると、このつぎは自分の番だと思わないわけにはいか

なかった。記事の中で、共犯の通称太郎と呼ぶ九州生れの男は東京方面に向つたらしいと書いてあるのが、わづかに気を安めさせたが、そんなことは、いまの良太郎にとつては、もうどうでもよかつた。たゞ■■■■なら、一度だけ、両親と美代とに会いたかつた。

そんなことを考えながら新聞を見つめていると列車は関門トンネルにはいつた。急にあたりが暗くなつたので、新聞から顔を上げた。とたんに良太郎■■■■くつとした。あの男だ。二つほど、向うの斜め前の席から、ハンチングをか■■■■無精ヒゲの男の顔が、ぼんやりとこちらを向いていた。すこし口もとのゆる■■、どこことなく人の好きそうな顔である。

トンネルを抜けると門司駅につく。つぎは小倉である。門司駅の発車ベルが鳴り止んで、汽車がうごき出すと、良太郎は便所に行く風を装つてゆつくりと立ち上つた。そしてそのまゝデッキに出ると、すでに速力を加えはじめた列車の上からホームとどび下りた。倒れそうになつたのを危ふく踏み止まると、そのまま走り去つてゆく列車の窓から乗り出すように一つの顔がのぞいているのが見えた。

良太郎は門司駅前から電車で小倉につくと、大門の停泊所で降りた。そこから家は数町のところにあつた。町の入口にはしめ縄が張つてあつて、揃いの裕衣^{ママ}をきた子供たちが太鼓台のあたりで、はしやぎまわつていた。大きな宝船の形をつくつた真鑄づくりの山車^{やまこ}や、赤い羅紗の幕を張つた笠鉾^{かまぼこ}が据えてある。太鼓台には例年のように青笹に小提灯をつるし、別に提灯ばかりの吊り台も備えてあつた。子供たちが、しきりに太鼓を打っている。

良太郎は家の中に入つた。最初に良太郎を見つけたのは母親のイネである。

「まあ。良太郎……。どうしとつた。よう、帰つてきたのう。……」

「すみません」

「おとうさん。……帰つてきましたよ。良太郎が帰つてきましたよ」

奥から父親の良助が、のっそり出てきた。

「うん。帰つてきたか。どうじゃ、イネ。わしのいう通りじやろうが。帰つて来るちゃ。さつと戻つてくるち、わしがいうとろうが。祇園の太鼓打ちを一年でも欠がすような良太じゃないッて。……のう。わしの云

うた通りよ」

「さあ、良太郎。お上り。早う。裕衣マヤに着がえて、出らんと、もう、そろ／＼集りの時間ぢやよ。わたしゃ、どうかな、思うとつたが、お父さんが、うんや、きつと戻ってくるけ、今年も裕衣は良太郎の分ぶんと二人分つくつとけといわれるもんやけ、ちやあんと、浴衣も縫うてある。さあ、早う着がえて、お神酒をいたゞいて出る支度を、おし、の。早うせい」

「良太郎。早う着換えい。早う上れ」

「ううう……」（と、良太郎が泣く。）

「なにを泣くことがあるか。待つちよつたんじゃ。今年はわしも打ち仕舞いかも知れん。今年こそは、ぜつびこつぴ、優勝旗を町内に持つて帰りたいもんよ。のう」

京都の神幸祇園、博多の山笠祇園とともに、全国の三大祇園の一つと称される小倉の太鼓祇園は北九州の華である。うつとうしかつたながい梅雨が終つて、あつい夏の太陽がかゞやき初め、それは町全体が汗びつしよになるほどである。その日も、太鼓の列はえん／＼つゞいて、八坂神社に詣り、それから紫川べりに向つて流れるやうに進

んでいった。今年の祇園太鼓の競演会場は紫川の河畔、勝山橋の袂であつた。多くの町内に混つて、良太郎の町であるしよくにん町のダシも川ぶちの会場に入つた。――（太鼓。はやし。）――

「え／＼か。良太郎。毎年の相手は、田町、豎町、京町、室町、古船場、紺屋町、中島旭町、どこもここも、一かどの打ち手を揃えて、うまい町内ばつかしぢや。去年は、おれたちは、たしか二等じゃつたが、今年は、さつちみち、一等をとるぞ」

「お父さん、安心しとくれ。良太郎も、今年こそはがんばるけな」

「やらうぞ、良太郎」

そのとき、マイクが叫んだ。

「次の町内は、魚町、京町、職人町、金田町。大人組。大人組の競演でございます」

――（呼笛の合図とともに、太鼓打ちが始まる。それを、一つの太鼓にしぼつて。――）

祇園太鼓は踊らない打ち方が古式だと言われている。一つの町内は二つの太鼓を持ち、一つの太鼓の両面の表を一人が打ち、も一人が裏面を打つ。つまり両面打ちなのである。このときの太鼓は父親の

良助が裏を打ち、良太郎は表打ちをした。良太郎の腕はのび、縮まり、ときにはバチを持つ手が空に舞った。陰陽の変化、千変万化の妙技である。橋の上から市役所の横、川の向う岸にかけての観衆、およそ二万人はあろうか。終ると万霊の拍手が湧いた。「本年の優勝、職人町。個人優勝、鶴田良助さん。個人優勝、鶴田良助さん」

再び、どつと拍手が起った。

そのとき、良太郎は愕然として立ちすくんだ。あの顔である。良太郎のすぐ近くで烏打帽をかぶり、いかにも好人物らしいすこし口をあけた無精ヒゲの男がにこ／＼と笑つて、良太郎に拍手を送つていたのである。

良太郎は、その男に向つて、こくと頭をさげると、父親にいった。

「お父さん」

「なによ」

「あの、となりの美代は、その後、どうしとりますか」「それが気の毒でう。なんでも東京に行つとるといふ噂じゃが、行き先が行き先じ」

(一 行分判読不能)

「そうですか。私は、これで失礼します。また大阪に行かになりません」

「そうか。うん。判つちよる。行つて来い。わしが一年前に大阪の警察にお前の搜索願を出したのが悪かったよ。それが手がかりになつたらしゅうてのう。きのうから、刑事さんが何遍も見えてじゃよ。からだを大事にしてくれよ。お前が、そんなに悪いことのでける人間でないことは、お父さんが一番よく知つとる。帰つて、着物をきがえたら、お母さんにも、ようと、礼をいうて行けよ」

「はい。もう二度と、こんな親不孝はしません。これでおくれ。それじゃ、お父さん。行つてくるよ。」

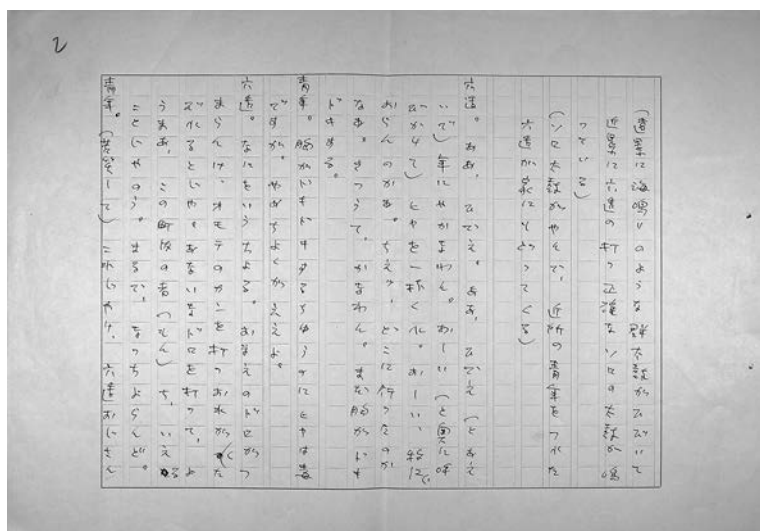
良太郎はジャンパーをきた無精ヒゲの前にいつて頭をさげた。男は良太郎の肩をぽんと叩いて、にこ／＼笑つた。

「うまいもんだなあ。君は。美事だつたよ。お父さんも一等になつて、安心しなすつただろう。おれを門司駅でまいたわけがわかつたよ。この太鼓が打ちたかつたのだな。ハハハ……。ちや、そろ／＼、行か。いまからなら、上りの急行に、充分、間に合うだろう」

(ラジオ小説版・完)



自筆原稿版 1 頁目



自筆原稿版 2 頁目

【翻刻・自筆原稿版「祇園太鼓」】

祇園太鼓

劉寒吉

時 現代、

人 父親の六造、

その子の牧江、

同じく太郎、

牧江の恋人の良一、

近所の青年（富吉）

群衆A、B、C、D、

テレビのアナ、

警察車の拡声器の声、

（遠景に海鳴りのような群太鼓がひびいて近景に六造の打つ正確なソロの太鼓が鳴っている）

（ソロ太鼓がやんで、近所の青年をつれた六造が家にもどってくる）

六造。 ああ、ひでえ。 ああ、ひでえ（とあえいで）

年にやかなわん。 おーい（と奥に呼びかけて） ヒヤを一杯くれ。 おーい、牧江、おらんのかあ。 ちえッ、どこに行つたのかなあ。 きつうて、かなわん。 まだ胸がドキドキする。

青年。 胸がドキドキするちゅうのにヒヤは毒ですが。 やめちよくがええよ。

六造。 なにをいうちよる。 おまえのがドロがつまらんけ、オモテのカンを打つおれがくたびれるとじや。 あないなドロを打つて、ようまあ、この町内の者^{もん}ち、いえることじやのう。 まるで、なつちやらんど。

青年。 （苦笑いして） これじゃけ、六造おじさんにはかなわんちゃ。 おじさんは、むちやくちやにケナスけんど、これでも、わしや、太鼓を打ちたいばかりに、わざわざ博多から小倉に帰ってきたんでえ。 六造。 ふーん。 富吉あ、いま博多におるのか。

青年。 うん。 だいたいなら、このごろは 對馬沖の漁に出とるはずなんじやけど、李ラインがまたやか

ましゆうなつて、しばらく博多港に釘付になつちよるもんじゃけ、そのスキを狙うてかえつてきたんじゃよ。

六造。 ふーん。 鬼のおらん間の洗濯と反対に、鬼のおる間の洗濯ちゆうわけか。

青年。 うん。 鬼がおつても、おらんでも、わしやあ、七月になると、毎年のことじゃが、気持ちがワクワクしてくるんじゃ。 船に乗つとつても、波の音が、なんかこう太鼓のひびきみたいいきこえてくるし、エンジンの音までが、ドンドコ、ドンドコと太鼓みたいにきこえてきて、ああ、早う国にもどつて太鼓が打ちないなあ、と、まるで太鼓に取り憑かれたみたいに腕がムズムズして来て困るんじゃよ。

六造。 ふーん。 永しゆう国を離れとつても、ぬしも、やつぱり小倉の子じやのう。

青年。 せつかく帰つてきても、牧江さんの顔を見らんと淋しい。 牧江さんどこにいったんじやろうなあ。

六造。 (キツとなつて) なにッ。 牧江。 ぬしも牧江をひやかしに来たんか。(大喝して)

牧江は、おらん。 なにをグダグダぬかしよるかと

思うちよつたら、牧江を冷やかそうと思つて待ちよつたんか。 帰れ。 帰りくされ。 牧江はおらん。

青年。 そ、そ、そんなことをいわれちゃ、迷惑じゃ。 なにかの誤解じゃ。 誤解しちゃ困るよ。

六造。 まだグズグズいいよ。 帰れ。 帰りくされ。 青年。 ああ、か、かえるよ。 うん、帰るよ。 帰るよ。

(とあわてて、出ていく)

(遠くの太鼓のひびきがやんでゐる)

(台所で物音がして)

牧江。 お父さん。 そろそろ、ご飯にしましょうか。

六造。 おお、牧江。 やつぱり、おつたか。

牧江。 ええ、どこにも出りやしませんわ。

六造。 そうじゃよ。 家の中におつても、ひとが来るよ、かくれてしまふお前じゃ。

牧江が、よそを出あるくはずはない。 かわいそうにのう。

牧江。 いいえ。 ひとの眼を避けるのは、あたいの癖ですわ。 お父さんこそ、こんなあたいを気にせんで下さい。

六造。(ホロリとして) うん。わかつちよる。わかつちよる。

さつきは、つい一杯ひつかけたかつたもんじゃけ、富吉がおるちゅうのを忘れて、お前を呼んだりして、わるかつてよ。こらえてくれよ。

牧江。ええんですの。さあ、ご飯にしましょう。

六造。うん。お前がわるいんじゃない。お前にや罪のないことじゃ。あれあ、まるで草原のまん中でドカンと雷に打たれたみたいないなもんで、ひどい災難じゃったよ。あのときのことを思うと、おりやあ、ハラワタが煮えくりかえるようじゃけ、お前がまだ忘れんのもムリじゃない。ありやあ、昭和二十五年の七月十一日、お祇園さんの晩じゃった。

(回想—太鼓の列が左から右へ、右から左へ、津波のように湧きあがり流れている。とつぜん、数発の銃声。とたんに、津波のよう太鼓のひびきがスーッと退いて、遠景になる。ワースと脱走する二百人の喊声。野蛮な奇声を混えて、おびたしい靴音が乱れる。ピツ、ピツと口笛。乱れる靴音。数発の銃声。この騒乱の情景が、スーッと退いて)

警察車の拡声器。こちらは警察署であります。ただいま、北方、城野方面で緊急事態が発生しました。ただちに家に帰って下さい。祭りは中止して、行列もそれぞれ町内に引き上げて下さい。今夜は特にひとり歩きは危険ですから、同じ方向に帰る人はできるだけ固まって歩いて下さい。各電車、バスの停留所には警察官が配置されていますから、警察官の指示によって行動して下さい。こちらは警察報道車であります。みなさん。ただいま、北方、城野方面に緊急事態が発生しました。ただちに家に帰って下さい。

(警察車、しだいに遠ざかって、夜の街の騒音の中で)

A. (女) なんだか、たいへんなことが起ったようね。こわいわ。いったい、どうしたちゅうのやろうなあ。
B. わからん。けど、気色があるい。早う、いのう。
A. どうしたつての。ね。どうしたつての。

C. 北方のキャンプから黒人兵が集団脱走したちゅうぞ。朝鮮の戦場に送られることになったつた連中

じゃが、玉よけになるのはイヤじゃちゆうて逃げたんじゃない。

D. なんでも二百人以上はおるちゆうぞ。

A. えッ。二百人もの黒人兵が逃げたの。こわい。

C. 祇園の太鼓がわるいんじや。あの太鼓の音が奴らを刺戟したらしい。あの太鼓の音はインデアンの太鼓に似とるちゆうことじや。

D. すると、あの太鼓の音で、黒人兵の血の中に眠つとつた野性の本能が目をさましたちゆうわけか。

B. そんなことがあるものか。小倉の祇園太鼓は三百年もの傳統を持つ小倉独持のもんや。インデアンの太鼓なんかに似てたまるか。

D. 似とるちゆうわけじやない。故郷のジャングルの中で鳴る太鼓を連想して血をわかしたちゆうわけじやろう。それに旗色の悪い朝鮮戦線に投入されるのはイヤじゃちゆう気分もあるうしなあ。

C. なにせ、五人か十人づつ一団になつて逃げまわつとるちゆうけ、そんなのが暗闇の中からワーツと出てみい、かなわんど。相手は自動小銃もつとるけのう。オナゴ連れは用心するがええぞ。

B. MPはどうしとるのじや。

B. MPも出動しとるじやろうが、相手は二百人もおるんじや。たまつたもんか。おうい。早よう戸を閉めい。危いぞ

(シーンとした静寂の中を、ひとりの女、牧江が歩いている。闇に中から突然に酔つた声がする。ヘイ・ムスメサン。牧江の驚いた声。一人の女と数人の黒人兵とが、争う物音。鋭く、一声、牧江の魂切る悲鳴がひびいて、またシーンとした静寂。男の低い動物的なうめき声。一人があッMP、とさけぶ。逃げる数人の足音。近く銃声。ヒューンと弾のうなり。拳銃と自動小銃が撃ち合つて――回想が消える)

六造の胸の中の呟き。あれから十年。ちようど十年過ぎた。警察からの知らせで、病院にとんでいくと、寝台の上で牧江は声をあげて泣いとつた。お祇園に参りたいちゆうので出してやつたのじやが、一人でやつたのが悪かった。あんなむごい目にあわせた奴らは憎いが、ひとり歩きをさせたおれにも罪はある。あのとき十八だった牧江は二十八になった。疵

のついた体を恥じて十年間も人目を避けとる可哀
そうな牧江――

(音楽)

牧江。 お父さん、もう一本つけようか。

六造。 すまんのう。じゃ、も一本オマケをつけてくれるか。

牧江。 明日からお祇園さんじゃけ、今夜は前祝いで
すよ。

六造。 (笑つて) すまんぞ。おかあさんちゅうのが
おらんばっかしに牧江には迷惑かけるぞ。

牧江。 お父さんこそ、ようがんばってくれたわ。お
母さんが亡うなつたのは、あたいが十三のときやつ
たかしら。

六造。 そうじゃろう。終戦の年の十二月じやつたけ
のう。あのとき、お前が十三じやつたとすると、東
京の太郎は八つ違いじゃけ、まだ五つじやつたのか。
十三の姉と、五つの弟、二人を残して死んだお芳も
さぞかし心残りのことじやつたろうが、俺も往生し
たぞ。

牧江。 そうねえ。でも、十五年もの間、ようがん

ばつてくれたわ。後添いの話があると、わしの女房
はこいつら二人の姉と弟じゃ、こいつが可愛いゆう
て、とても後添いなんか貰う氣持がせん、なんち冗
談いうて、話を斷つたりして、ほんとうにすまん氣
持じやわ。

六造。 かわいそうなのは牧江、お前よ。遠山の良一
とあんなに仲がよかつたのに、あのことがあつてか
ら、良一はグレてしもうて、チンピラヤクザみたい
になつて、あげくの果ては行衛^{ゴウ}不明じや。お前は家
をひと足も出んようになつた。太郎も全学連たら
ななたらいうて東京でさわいどるらしいが、むりも
ない。良一、ええ若い衆^{しゅう}じやつたが、どうしとるか
のう。

牧江。 お父さん、良一さんのことはいわんで。あた
い、もう、あの人のことは忘れてしもうとる。

六造。 いや。いわせてくれ。お祇園さんになると、
あれのことを思い出すよ。なにしろ、子供の頃から、
手をとつて太鼓を教えてやつたのじゃけのう。筋の
ええ太鼓じやつたよ。はじめはウラのドロ口^{くち}ばっかし
を二年も打たせてやつた。二年目には、おじさん、
ドロはもう飽いたけ、カンを打たせておくれちゆう

のを押さえつけてドロを二年つづけさせた。それからオモテのカンに移つたのじゃが、ドロも打つ間に太鼓の呼吸をおぼえてしもうとつたもんじゃけ、オモテを打ち出したら、そりやあ美事なカンよ。カンを打つて三年目には、評判になつて、古船場やら堅町^{まち}やらの当時の名人といわれとつた連中がこの町内まで良一の太鼓を見に来たくらいじゃけのう。

牧江。（楽しそうに）そうよ。ほんとうよ。良一さんの打ち方は、スツスツと腕が伸んで、だいいち姿勢がよかったもんねえ。

六造。城内で太鼓の競技会があつたときよ。この町内が一等になつたのはもちろんじゃが、特に良一は個人最優秀技能賞ちゆうのを貰うた。あの晩は良一と飲んだぞ。

牧江。お父さんがあのときは、チャンガラを打つたわねえ。

六造。うん。そうじゃつた。良一がおりさえすれあ、優勝は毎年、この町内ちゆうことに決るのじゃが、残念なことよ。あいつばかりは惜しい。おれの左官の弟子にして、お前とも仲良しじゃつだし、お前のムコは良一と、おれは決めとつたのじゃがのう。

（遠くで、ヤッサヤレヤレヤレのハヤシと道を行く太鼓の音がはじまる）

六造。おや。となりの町のトモ揃いがはじまつたな。うん、やつちよる、やつちよる。じゃが、あの太鼓の調子じゃ、まだまだじゃ。カンに押さえられて、てんでドロの方がひびかん。ドロつてのはカンに対する裏調子じゃが、ドロとカンが響き合ひにやあ、祇園太鼓にはならん。

（とたんに足音がして）

太郎。お父さん。ただ今。帰ってきましたよ。

牧江。まあ、太郎。

六造。おッ、太郎。（笑つて）うーん、太鼓のまに合うた。よう帰ってきた。

太郎。コンクールの間に合いましたか。

六造。え。コンクリーちゃんなんじゃい。

太郎。コンクールですよ。太鼓の競演会ですよ。

六造。うーん、競技会か。うん。間に合うた。お祇

園さんの第一回、あしたじゃ。天守閣の下である。

太郎。そうですか。よかつた。今年はどうしようかな、と迷うとつたのですが、姉さんから、ぜひ帰つて来いと手紙をもらつたもんだから、仕事をおつぱり出して帰つてきましたよ。

六造。なんじゃい。その、全学連ちゅうのがそんなに忙しいのか。

太郎。いいえ。アルバイトの方です。お父さんに学資の心配はかけんと約束してありますからね、稼ぎまくつとるんですよ。

牧江。太郎も大変だわねえ。

太郎。そりやそうと、姉さん、良一さんに会いましたよ。

牧江。えッ。良一さんに。

六造。ど、どこで会うた。

太郎。帰りの列車の中です。大阪から乗つた人がぼくの前に掛けたのですが、話し合うと、どちらも小倉までということ、もうずいぶん久しく会わんですつかり見忘れていましたが、それが良一さんだったのです。

六造。ふーん。大阪におるちゅうことはきいとつた

が、どんな風じゃった。

太郎。なんでも日通のトラックの運転手してるそう、収入もいいらしいんですが、まだ独身なんですつて。

牧江。まだ。そうなの。

太郎。姉さんのことが忘れられないんだな。(と笑う)

牧江。まあ、そんなことはないわ。

太郎。姉さんだつて、そうなんでしょう。

牧江。ばかなことをいうんじゃない(と叱つて、クスリと笑う)

太郎。ハハ……。

六造。なら、太郎と一緒に帰ってきたのか。

太郎。ええ、一緒でした。ぼくと同じです。しばらく国に帰らんんだが、どうしても太鼓が打ちたいんですつて。

六造。良一が帰る。太郎が帰る。先き隣りの船乗りの富吉も帰ってくる。みんな太鼓を打ちに帰ってくる。祇園太鼓ちゅうものは小倉の者の骨じゃい、肉じゃい、心じゃい。

太郎。今年の優勝旗は町内が取りますよ。

六造。それにしても、良一、どうして、あいさつに
来んのじゃろうかのう。

青年。（入って来）おじさん、町内のトモ揃いがは
じまります。そろそろ集つてください。

六造。今年は、おれは出らんよ。太郎をだすよ。

青年。ほう、太郎さんが帰つてきましたか。そんな
ら、太郎さんを、どうぞ。

太郎。はい。すぐ行きます。

六造。あしたの太鼓ではぜひ勝つように、今夜は、
よう稽古しとけや。

太郎。はい。じゃ、ちよつと行つてきます。

（と出て行く。太鼓が鳴り出す）

（太鼓に代つて音楽。音楽……）

六造。ええ天気じゃのう。カンカン照りじゃ。やつ
ぱり照りつけにや、お祇園さんらしいない。どの町
内も、ダシがみんなお祇園さんにおまいりして競技
会場にでかけたもんじゃけ、町内の方は波がひいた
ように静かになつたよ。牧江や。

牧江。はい。

六造。もう競演会がはじまつとる頃じゃが、お城ま
で行つてみるか。

六造。あたいは、もう。

六造。そうか。いや、そうじゃつた。なら、テレビ
でも見るか。スイッチ入れてみんな。やつちよる頃
じゃ。

牧江。そうねえ。

（太鼓競演会の実況放送が入ってくる。）

（しきりに太鼓のひびき。群衆）

アナ。魚町銀天街のダシがすぎて行きます。町内の
若い衆、子供百人あまり、揃いのユカタにハチマキ
をしめて、ダシの上の笹につるした小提灯がゆれ、
ヤッサヤレヤレのハヤシに乗つて威勢よく太鼓を
打っています。ダシの前後に一つづつ据えた二つの
太鼓を両側から一人づつ、二つの太鼓を四人で打つ
ています。この太鼓の片面、甲高い音を出す方がオ
モテでカンと呼び、片方のウラをドロと呼び、両方
とも打ち方は違いますが、おどり上り、はね上がった
打つ威勢のよさは、まさに天下一品の無法松その

ままの情景です。つづいて、万町のダシが現れました。うむ。これはうまい。見物人から万雷の拍手が湧いています。カンもうまい。ドロも美事。審査員は異口同音に優勝候補だと評判しています。しばらくこの妙技をごらん下さい。

六造 うーむ。やるのう。さすがは、うちの町内や。やっちよる、やっちよる。

牧江 あッ。お父さん。太郎の向う側でカンを打つとるのは良一さんだわッ。

六造 どれ、どれ。うむ。良一じゃ。うまい。この六造が手をとって子供のときに教えたとおりの打ち方じゃ。すこしも狂いがない。うまい。良一、みごとじゃ。

(太鼓の音が盛り上って、……音楽)
(音楽から、町内にもどって来た太鼓)

太郎 姉さん、良一さんを連れてきましたよ。

良一さん、きまりわるがって仕様がな感じです。

牧江 まあ、良一さん。

良一 牧江さん。

牧江 立派になって。

良一 ちつとも変つとらん。

六造 良一、ぬしが来るのを待つとたぞ。

良一 おじさん(と感動して) 牧江さんをわたしの嫁さんに下さい。わたしは本当は牧江さんをもらいに帰って来たのです。

牧江 いけません。いけんわ、いけんわ。そんなこと。

良一 十年たつた。わたしはこの十年間を待つとつた。十年の年月としつきは、なにもかも 洗い流してくれたよ。牧江さん、わたしの嫁さんになっておくれ。たのむ。たのむよ。

牧江 (静かに泣く)

六造 ようし、良一も牧江も太郎も、みんな外に來い。万町の太鼓の六造といわれたおれが一世一代の祇園太鼓を打って見せる。

(静かに落ちついた太鼓の音が鳴りはじめる)

(終)

主な寄贈資料

二〇一八（平成三〇）年度

■小原菁々子（おはらせいせいし） 自筆資料 九点（短冊、葉書）
安岡正篤（やすおかまさひろ） 自筆資料 一点（短冊）

寄贈者 野中貴子

受入月 二〇一八年四月

※寄託（二〇〇八年）からの切り替え
元西日本新聞社記者の野中氏が、先輩記者の江頭光（えがしひさみつ）から譲り受けた資料。

小原菁々子（二九〇八〜二〇〇〇）は福岡市生まれの俳人。河野静雲、高浜虚子、高浜年尾、稲畑汀子に師事。静雲の没後、俳誌「冬野」を継承主宰した。短冊一点（「大前のしろがねの雪蹴く」と、江頭光宛葉書八点）。

安岡正篤（一八九八〜一九八三）は、大阪市生まれの陽明学者、思想家。政治団体「国維会」を結成し、日本主義思想にもとづく新官僚運動を展開。戦後は政

界・財界・官界指導者の精神的支柱として、憲法改正運動などを推進した。短冊「奥山に幾千代経ぬる神於の穂なみうつ羅を照す月かな」。

■山本飛雲（ひまづん）資料 二点（書）

寄贈者 山本飛雲

受入月 二〇一八年四月

山本飛雲氏（一九四〇〜）は北九州市若松区在住の書家。雲心書道会主宰。

展覧会（「山本飛雲展」二〇一七年 北九州市立文学館）で展示された書作品。林芙美子「放浪記」の冒頭、宗左近「炎える母」の詩の一節が揮毫される。それぞれ、林芙美子記念室（北九州市門司区）、宗左近記念室（北九州市戸畑区、戸畑図書館内）に展示。



『北九州の文学を書く・山本飛雲書展』より転載

■ 柏木恵美子 旧蔵資料 二〇六九点（書籍、雑誌）

寄贈者 柏木恵美子

受入月 二〇一八年四月

柏木恵美子氏（一九三一〜）は北九州市在住の詩人。詩集『炭街』で福岡県詩人賞奨励賞、『幻魚記』で福岡県詩人賞を受賞。児童詩「冬のふじだな」「ちよう」が小学校の国語教科書に採用された。

詩誌「たむたむ」、文芸誌「青い花」、児童文学誌「小さい旗」同人。「詩と思想」「詩学」「現代詩手帖」などの詩誌、「青い花」「千年樹」「子午線」などの同人誌のほか、児童文学書籍。

■ 中村哆佳子^{たかこ} 人形

「足袋つぐやノラともならず教師妻」 一体

寄贈者 宮澤篤

受入月 二〇一八年六月

人形師・中村哆佳子氏（一九二七〜）が、杉田久女の俳句をもとに制作した人形二〇体を紹介する企画展

「ノラともならず 創作人形とよむ杉田久女の俳句」
（二〇〇七年 北九州市立文学館）で展示した人形の
一体。



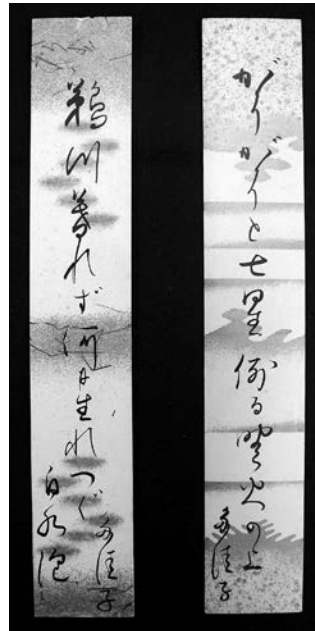
■ 橋本多佳子 自筆資料 二点（短冊）

寄贈者 増田恵津子

受入月 二〇一八年九月

橋本多佳子（一八九九〜一九六三）は、北九州市ゆかりの俳人。増田氏は、多佳子が主宰を務めた俳句結社「七曜」会員。

短冊「がうがうと七星倒る野火の上」、「鶴川暮れず
何に生れつぐ白水泡」。



■北九州の児童文学関連資料 二五点（雑誌、弔辞）

寄贈者 菅原滋子

受入月 二〇一八年一〇月

北九州の児童文学雑誌「小さい旗」創刊号など二〇冊、福岡の児童文学雑誌「火の国」四冊のほか、「小さい旗」同人として活動した世良絹子（一九二五～二〇〇二）への水上平吉（当時、同誌主宰）の弔辞。

■安武斗柄（やすたけとへい） 旧蔵資料 三二四点（雑誌、印刷物、書籍、写真、短冊、色紙など）

寄贈者 前田秀子

受入月 二〇一八年一月

安武斗柄（一九〇一～一九七五）は、宗像郡津屋崎町（現・福津市）生まれの俳人。戸畑で俳句結社「わだつみ吟社」を主宰し、一九三五（昭和10）年、俳誌「わだつみ」を刊行。北九州俳句協会主催の大会などで選者を務めるなど、北九州の俳句界発展に貢献した。俳誌「わだつみ」、「土上」など一八七点、短冊八五点のほか、北九州俳句協会、わだつみ吟社などに関する印刷物など。

■伊馬春部 自筆資料 三点（色紙）

寄贈者 鈴木睦子

受入月 二〇一八年二月

伊馬春部（一九〇八～一九八四）は、現・北九州市八幡西区木屋瀬生まれの劇作家。國學院大學在学時、

短歌結社「鳥船」に入会し折口信夫（釈道空）の指導を仰ぎ、歌人としても優れた歌を遺した。

NHKで伊馬と同僚だった益井三弘氏旧蔵の色紙。短歌「ふりかへり ふりかへり見る坂のうへ 吾子はしきりに手をふりてをり」、「とざしつゝねむることありはるばるの まらうどならば鈴ふりたまへ」、皿倉山山頂で詠まれた「玄海はけむりのかなたかへり見る 福智の嶺も霧の中なる」。

二〇一九（平成三一・令和一）年度

■火野葦平 自筆資料 二点（色紙、短冊）

寄贈者 原口格^{ただし}

受入月 二〇一九年四月

火野葦平（二九〇六～一九六〇）は、現・北九州市若松区生まれの小説家。「糞尿譚」で芥川賞を受賞、戦時中〈兵隊三部作〉がベストセラーとなる。戦後の

代表作に『花と龍』『革命前後』。

葦平が「花と龍」執筆取材のため、宮田町（現・若宮市）を訪れた折に知己を得た原口政吉氏に贈ったもの。色紙は、三猿（「見ざる聞かざる言わざる」）を河童に変えた絵と画賛。短冊「野いばらの嵐の道を男の子われ行く甲斐ありと胸はりてゐぬ」。

■八幡製鐵所労働組合の機関紙「青いリボン」 九七点

寄贈者 佐々木博子

受入月 二〇一九年六月

旧八幡製鐵所の労働組合本事務所地区婦人部の機関紙。第一号（一九五四年四月）から第九三号（一九六四年五月）まで確認。



■後藤みな子 自筆資料ほか 七点（原稿、愛用品）

寄贈者 後藤みな子

受入月 二〇一九年八月

後藤みな子氏（一九三六～）は北九州市在住の作家。一九七一年、小説『刻を曳く』で第八回文藝賞受賞、第六回芥川賞候補、第一回平林たい子文学賞候補、ほか「三本の釘の重さ」で第六七回芥川賞候補となった。二〇一二年、『刻を曳く』の続編といえる『樹滴』を刊行。

自筆原稿一二枚、校正稿、万年筆や文鎮などの愛用品。

■向野楠葉^{なんよう}ほか 自筆資料 四三四点（絵画、書画、創作ノートなど）

寄贈者 向野利彦

受入月 二〇一九年八月

向野楠葉（一九一〇～一九九四）は昭和期に北九州で活動した俳人。医師を務めながら、「ホトトギス」

系の俳人・皆吉^{みなよし}爽雨^{そうう}に師事。句集に『遠賀野』『先鳥』など。

楠葉主宰の俳句雑誌「木の実」の表紙絵を描いた平野遼（北九州市を拠点に活動した洋画家）の絵画・六一点、皆吉爽雨、河野静雲、山鹿桃郊の掛け軸、色紙、短冊などの書画・一四点、句集「遠賀野」の創作ノート、原稿などの自筆資料・三五九点。

■田中九州男^{くすお} 旧蔵資料 一五九点（書籍、書画、飾り皿など）

寄贈者 西川啓美

受入月 二〇一九年一〇月

北九州森鷗外記念会の理事を務めた田中九州男（一九二七～二〇〇八）の旧蔵資料。『鷗外全集』全三八卷（第二刷）、北九州森鷗外記念会だより合冊本、鷗外の研究書など一五〇点のほか、劉寒吉色紙、飾り皿（原田種夫、林逸馬、火野葦平、劉寒吉のサイン）など九点。

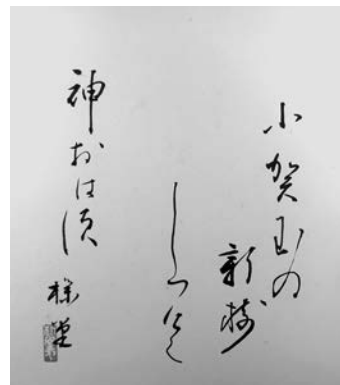
■廣吉樸堂 ひろよしぼくどう 自筆資料ほか 四五点（書籍、色紙、短冊、飾り皿、ノートなど）

寄贈者 大八木あつ子

受入月 二〇二〇年三月

廣吉樸堂（一九〇八～一九八一）は、現・北九州市小倉南区頂吉に生まれ、長く小学校校長として勤めたのち、「俳諧草茎」くさぐさへぎ北九州支部の初代支部長を務めた。俳誌「草茎」は、一九三五（昭和10）年、反ホトトギスの俳句を提唱した宇田零雨うだれいりゅうにより創刊、零雨の没後は「くさくき」として継承。

樸堂の句集『小賀玉句集』『続小賀玉句集』などの書籍のほか、自筆の色紙一二点、短冊一八点、飾り皿（零雨筆も含む）、スクラップ帳ノートなど。



小賀玉の
新樹
しづけく
神おはす
樸堂

北九州市立文学館紀要 第 3 号

令和 3 年 3 月 31 日 発行

編集・発行 北九州市立文学館
北九州市小倉北区城内 4 番 1 号
電話 093-571-1505

製 作 有限会社 青雲印刷

※凡例については、各論考に記しました。

※現在では適切でない表現の見られる資料があります。当時の社会状況を理解するため、そのままとしました。御理解の上、御了承ください。

※本内容の無断複製、転載等の行為を禁じます。